
Angel's Share **天使の分け前**

シトラチネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel's Share 天使の分け前

【Nコード】

N0721V

【作者名】

シトラチネ

【あらすじ】

沼に天使が落ちていた。救いを請う儂い瞳、憂いを含んだ鈴の声で天使は告げた。「あなたの恋を食べさせて。でなきゃ魔界へ逝っちゃって」恋をゆるする有翼青年 天使にもなり悪魔にもなる、異郷の雛。（以前、別サイトにて掲載していたものをサイト閉鎖により移植。お題配布元「モノドラマ」さま・閉鎖されました「羽の10題」）

1 . 撃ち落とされたあなたを拾った日

恋と悟った瞬間は、Waterと叫んだヘレン・ケラーに似ている。

本能は薔薇色に弾けて咲き誇る、だが眠らせておけば鈍色の幸福で足りた。

恋を悟った者たちは、現実主義への転向を迫られる。

現実 落馬する王子様や、黒い翼の天使など。

1 . 撃ち落とされたあなたを拾った日

その朝まで、正確にはその青年に会うまで彼女は他の多くの人々と変わらず、凶事の予兆は曇天と素直に信じていた。

すかりと晴れた青空に、風見鶏が上機嫌で胸を張る。思いもよらぬ遠方から幸福の便りが届く予感、そんなくすぐったい風に尾羽を立てて。

濃い森に映えるターコイズ色の六角屋根。頂上の風見鶏を見上げ、朝露と土と森が作り出す至上の香を胸一杯に沁み渡らせながら、彼女は身体を伸ばした。

「ふわあ、きれいな朝……天使が遊びに来てくれそう」

皮肉な劇の幕開けは、美しい朝を愛でた彼女が柔らかな芝の庭からキッチンへ戻り、コーヒーマルを一回しした瞬間だった。ハンドルに繋がるのは運命の歯車か、厄介な爆弾の発火装置だったのか。

窓ガラス越しに届いた梢を打つ慌てた羽音と騒がしい葉ずれ、意味するのは狐の来訪。父の愛する鴨たちを守ろうと、猟銃片手に迷わず飛び出す。

幼い頃から親しんだ森の違和感を、入るや否や肌が察知した。

下草が道を開ける。繁い茂り、侵入を嫌って人の足を絡め取るのが彼らの仕事にもかかわらず。

枝葉が身を反らす。視界から退き、光を通し、照準を導く。

普段にない異変に狩りの神の加護を授かったのかと、猟銃を握る手にも力が入った。

「これなら仕留められる！」

冬のマフラーはフォックス・ファーでぬくぬく、とほくそ笑んだその時。

「わっ……」

森が途切れ沼地が開ける一歩手前で、ぬかるみが彼女の足をすくって転倒させる。手を突いた狙撃手の下草と灌木に遮られた向こう側で、鴨ではない、もつと質量を持った獣が動く気配がした。

「逃がすものか、マフラー」

その一心で泥に膝立ち、音源へと引き金を引く。

……ボシャン。

一拍後に響いた重い水音は仕留めた興奮よりも焦りを先に連れて来た。泥炭を含んだ沼に落ちてしまえば、せつかくの毛皮が使い物にならない。底なし沼では回収も無理だ。

慌てて灌木をかき分けて開けた沼地、そこで泥水に浸かっていたのは狐でなくて 天使だった。

横向きに倒れている人影は、髪の色も判らぬほどに泥水をかぶっている。それでも人間に有ってはならないものが在ることは、動揺する彼女の目にもはっきりと見て取れた。

べつたりと塗られた泥の所々から覗く白い、幾千枚もの羽根。それらは密に重なり合って収束し、人影の背中へと到達している。

「翼……？」

見間違いかと目を凝らし、強く瞬く。その間にもとろけたチヨコ

レートのように柔らかい泥沼は、蛇が卵を呑み下す不穩めいた緩やかさで人の形を先端から浸食していく。

墮ちた天使が泥に穢され底なし沼へ沈んでいく、その様は禁断の書の挿絵のように見る者を縛った。

「……僕を」

「えっ」

「僕を撃つなんて……」

不意に天使が口を開いた。嘆きに打ち震えるその声は、まさに命を折り取られようとしている一本の百合を思わすほど繊細にして透明。

ゆっくり仰いできた泥だらけの顔の中で、二つの瞳がアメジストのように輝いていた。地中の黄金、夜の海に映る月、宇宙に浮かぶ新星、そのどれより高貴な光を宿している。

救いを請う儂い瞳、憂いを含んだ鈴の声で天使は告げた。

「お詫びにあなたの恋を食べさせて。でなきゃ魔界へ逝っちゃって」
「……………」

これが天使であろうはずがない。それは神への冒瀆だ。気高い瞳は錯覚だ。彼女は素早く思考に現実を叩き込む。恐らく彼は密猟者。獲物の白鳥でも背負ってるのが、天使の翼に見えるだけ。そういえば町の酒屋が空巣に荒らされたと聞いた、彼がその犯人かもしれない、と。

「僕が沈んで完全犯罪になるのを待っているんでしょうか」

密猟者で空巣で、プラス精神が魔界に侵されてる人だとしても、と彼女の理性が働きます。自分の不注意で発砲したことに変わりはないのだ。

「まさか！ 待っててください　あ、犯罪成立をじゃないですよ。いま助けに行きますから！」

幸い沼の縁に近かったおかげで、彼の足を掴んで岸へ手繰り寄せ
ることに成功する。続いて両手を握って上半身を引き起こそうとす
るのだが、泥を含んだ翼が重すぎる。

「白鳥、捨ててください」

「白鳥は使役対象外です」

「なら白鷺ですか？ どっちでもいいけど、背中の荷物を早く捨て
てください。引っぱり起こそうにも、そろそろ、背筋がつかいこと
にっ」

「あなたのせいで落ちたのに、僕が叱られるのは不合理です」

的確にして傲慢にも感じられる言葉。しかし瞳はこの世の不幸を
一身に負っても健気に耐える少年のようで、それ以上の強制をため
らわせる。

そもそも彼の両手を捉えているのだから、荷を捨てると言っても
捨てる手がないと思いがたり、彼女は半ば自棄な気分で引く腕に力
を籠めた。途端に青年の喉から、鷺の鉤爪に囚われた野兎のような
悲しげな鳴き声が漏れる。

「すみません、翼が抜けそうです」

「わたしは肩が抜けそうです。……なんかその羽、背中に刺さって
るように見えるんですが」

「生えてるんです。ところで、そろそろ答を選んで。食事か魔界か、
どっちでしょう」

彼女は底なし沼脱出のかかった緊迫した場面で、のんびりと妄想
世界に浸っている相手を睨みつけた。既に背筋も腕も震えることで
限界を訴えている。

「ご参考までに空腹な僕としましては、魔道を開いて疲れるより、
あなたの恋を食べたいです」

「……あ、鯉……？」

魔云々は無視するとして、彼が食べたがっているのは鯉かと合点す
る。この敷地には水の澄んだ池もあり、鯉やフナが泳いでいる。飼
っているわけではなく、料理しても父に怒られることはなさそうだ

った。

とにかく発砲した落ち度は当方にある。加害者として医療費やさしあたっての食事くらい都合せねばならぬというものだろう、と彼女は怒りを押し殺した。

「分かりました。鯉くらい、いつでもいくらでも」

「感謝します」

彼が爽やかに微笑むと同時に、泥は彼を解放したようだ。おもりを失った反動によるめく彼女の体は、間髪入れず腰に巻きついてきた腕で際どい均衡を取り戻す。

頼りない爪先が少しでも乾いた足場を求めて彷徨っている間に、回された腕は急速に直径を絞った。

「では、遠慮なくいただきます」

天使のキスは泥の味。

「同意を得たのに。沼に突き落とされ銃を向けられるのは、不条理にして二度目です」

「発砲して申し訳ありませんでした、どうぞ速やかにお引取り下さい」

脱出したばかりの泥沼に再びずぶずぶと下半身を消されながら、青年は悲嘆に暮れて端正な眉をひそませる。

「まだ腹三分目……」

「そんな、ずぶ濡れの子犬が怯えながらも鼻先寄せてくるような顔したって、だ……騙されませ……」

視線で殺すとは言うが、視線で泣き落としてくる青年に、背を向け歩き去るのは難しいものがある。彼女が口ごもっていると、青年はさくさく泥をかき分けて底なし沼から上陸してきた。

「自力で脱出できるんじゃないですかー！」

「じゃあまず、泥を落とすの手伝って」

「騙されませんってば」

「傷が痛みます……」

胸を押さえてしんなりうなだれる青年。

口の減らない様子から怪我はないように思っていたが、銃弾が掠めるくらいはしたのかもしれない。しかも最初の過失の銃撃と違い、この状況下で撃てば明らかに狙撃。法を守る一般市民として刑務所という魔界を遠慮したいのは当然だ。

考えてみるに、彼は銃弾に当たらないことで殺人罪から救ってくれたのだ。罪の意識は、標的の確認を怠った己への呪いは、刑務所という身体的な拘束より遥かに救われぬ魔界に違いない。

曇天でなく快晴で正解。一步間違えば暗黒の日になり得たものを、彼が怪我で済ませてくれたのだから。人は不運を嘆く前に、不運と断ずる自らの被害者意識を恥じるべきかもしれない。ヘレン・ケラーは障害を負ったからこそ、サリヴァン先生に奇跡を起こさせたのだから。

彼女は息をついて銃口を下ろした。

「うちのバスルームを使ってください」

「感謝します。親切にしてください、下界も良いものです」

全身からぼたぼたと引きずる泥もなんのその、軽やかな足取りで青年は歩き出した。肩を落として彼女は後ろへ続き、もう間違いを犯さぬようにと猟銃の安全装置をかけようとして、ふと気付く。

この猟区はシーズンオフ、つまり禁猟期間で、害獣を追い払うためでも実弾は使えない。代わりに装填してあるのは空砲だったはずだ。

「……あのう……弾、当たってませんよね？」

「ぱちぱち、と紫の瞳が瞬いた。」

「あなたは僕を撃ちました」

「それは認めます。でも空砲なんです。傷が痛いなんて嘘ですよね」

「人間に弓引かれるなんて、僕の心はいたく傷つきました」

彼女は決めた。家に戻ったらまず、実弾装備だ。

2・洗うときはシャンプーか石鹸か

気に入りのホーロー製猫足バスタブも、空色タイルも、大きな泥足で無残な蹂躪に遭った。

風呂磨きが趣味化している者にしてみれば、キスを奪われるより耐え難い陵辱である。実弾装填したら本当に撃ちそうで、彼女はそれを自制した。

泥青年をバスルームに案内してから父のクローゼットを物色する。父のスポンは彼には太すぎ短すぎ、シャツも袖の長さが合わないだろうが、我慢してもらうしかない。

適当に見繕った服を置こうとバスルームの前へ。ところが青年は押し込めた時そのままの状態で突っ立っていた。唯一違うのは、折れた墓標を前にした弔客のようにうなだれた首の角度くらいか。

「この泉は枯れています」

と、空のバスタブを指差し、例の悲哀漂う薄幸少年風な情緒で嘆いている。バスタブの排水口から水が湧いてきたらそれは泉ではない。

「シャワー使ったこと、ないんですか？」

「水浴びしたいのです」

口八丁手八丁の不法侵入者の癖に、バスルームもない極貧の田舎から出てきたとでもいうのだろうか。性質の悪い悪戯なのかと真意をしつこく問うより関わらない方が得策と踏み、彼女は仕方なくバスタブに湯を出す。

待ち切れなかったのか、泥青年は着衣のままいそいそとバスタブに身を沈めた、というか身を潜めた。しかし容易に落ちない泥汚れに困惑して、ごしごしと必死にこすっている。

のちのち赤く腫れそうなほど摩擦される肌を見かねて、フレンチバナナのバブルバスソープが投入される。途端にモコモコ盛り上がる泡を前に、泥青年の瞳が輝きだした。

「雲の中にいるようです。天使の特権と思っていました」

泡が立つほどに彼の機嫌も膨れて弾けるようで、きゃーい！う
えーい！と、歓喜のあまりか奇声を発しながら無心に泡と戯れて
いる。

とても演技と思えず、愛らしい、などといふ緩みかけた頬を彼女は
理性と手の甲で押さえ込んだ。

「あの、父ですけど服を外に置いておくので……」

入浴を覗く趣味はないと引き下がろうとしたところ。ぱたん、と
ドアが勝手に閉まった。

「僕の羽、洗って」

「なっ……なっ……なんでっ？」

「体がかたくて、腕がつります」

自動で行方を閉ざしたドアの謎、翼の真偽も問いたいが少なくと
も、当然の権利のように体を洗えと言われる筋合いがどこを探して
もないのは明らかだ。

変質者を罵る言葉を探して彼女がアワアワしている間に、本物の
あわあわの中で泥青年は服を脱ぎ始めた。

「露出狂ですか」

「裸は恥と決めたのは人間です。アダムとイヴが知恵の木の実を食
べたのがいけないのに、そんな言い方は不条理です」

「ええと……」

「人間が着衣を求めるようになって、仕方なく天使も悪魔も合わせ
て服を着ているのです。不本意です」

危機管理意識のある女性としてごく常識的な対応をしているつも
りだったのに、ごめんなさいと謝りたくなってくるのはなぜだ
彼女は頭を抱えなくなつた。

しかし彼の言い分にも一理ある。異常犯罪、性犯罪、そんな知恵

の木の実を食べたばかりに、人々は何気ない出会い頭から恥部を隠すように背を向け走り去る。そうやって邂逅より広がる温かな幸福を手放すのなら、それはまさに失楽園だ。

とはいえ下手に逆らうより適当にあしらって帰してしまわないことには、このどうにも返答に困る会話が延々と続きかねない、と彼女は観念して裾と腕をまくった。

「解りました、背中ですね。洗いますけど……バスタブに、その泉に浸かってください」

いざとなれば使い込んだデッキブラシや洗剤類が武器になる。すっかり脱いでしまった彼の前面から精一杯顔を逸らせながら、背中側に回り込んだ。

「火を噴く山が近いのでしよう。この泉はやけに熱いです……」

いまだに給湯システムを理解していないらしく、ありもしない火山を確認したいのか窓へと首を伸ばしている。

「ぬるいのが好きなんですか？」

「泉というのは冷たいと相場が決まってるんです。死体がほっかほかだとイヤなのと同じです」

「例えがサイテーですね」

ここまで来て彼女は八丈と気付いた。青年は服をすべて脱いでしまったのに、背中泥まみれ白鳥は健在だ。背負ったものを下ろさずに脱衣するなんて芸当は、体のかたい人には不可能なはず。

白鳥の翼を引っぱって見た。彼の背中がついてきた。

「痛いです」

白鳥の羽根をむしって見た。彼の背中が引きつった。

「痛いですってば」

とんでもないものを拾ってしまった。

「天使？ 本物の天使っ？」

滑稽に裏返った声がバスルームにわんわんと反響する。

「そうとも言えます」

だが当の本人は平静なもので、掌に掬い上げた泡をためつすがめつ検分しており、返答には何の感情も差し挟まれていない。そのあつさりとして微妙な否定が彼女を少し落ち着かせた。

それでも指先の羽は彼女の驚愕を如実に反映して震えている。千々に揺らされた柔らかな羽毛が静けさを取り戻すまで、ぎこちない深呼吸は繰り返された。

熱が下がっても眩暈を残すように、衝撃が去った後も煙って鈍した頭で再考すれば、青年の言動は天使よりもむしろ。

「悪魔？」

「そうとも言えます。僕は幼生です」

「……妖精？」

「幼体です。子供、候補生、予備軍、見習い、雛鳥、卵。成年に達した時、魂の清廉さにより天使か悪魔に分かれます」

そんな話は初耳だ、と彼女は呻く。すると青年の両手はV字に掲げられ、掌に盛られていた泡を二分してみせた。

「人間こそ好む概念です。最後の審判や閻魔大王を経て、罪の重さで永遠の命を得る者と地獄へ墮ちる者にふるいをかけられるでしょう。不勉強です」

「なんだかさつきから、不合理とか不勉強とか責められてばかりな気が……」

「悪魔はヘブライ語で告発者という意味です」

「開き直るって意味は含まれてないんですか？」

彼が首を振ると、髪の毛束から泥がビチビチ飛んできた。憎たらしさは悪魔及第点だ。

「責められるのが不快なら、あなたの恋を食べさせて。食べ足りなくて魔性が疼くんです」

「キスを強奪するのはすでに立派な悪魔的行動だと思っんですが。犯罪ですよ、立派な何とか法違反です」

「立派な 天使になる方法……」

「違いますっ。軽犯罪法！ でも立派な天使になる方法違反とも言えますね……」

激しく言い負けているのを感じ、彼女は情けなさに眉間を押さえる。

「あなたの恋を食べてるんです。キスを強奪したただなんて……同意の上での行為なのに、不当です」

同意したのは鯉料理であって、と反論しようとしたが。

うなだれながらめそめそと泡を突ついている青年にそう言ったら泣かせてしまいそうで、彼女はとりあえず黙った。怒りを買って魔界に告発されるのは困る。

さて、羽を洗うにはシャンプーか石けんか。

何しろ洗ったことがないため見当もつかず、両方のボトルを手に彼女は首を傾げる。原油流出事故で油まみれになったペンギンには、食器用洗剤がいらしいのだが。

後になって不のつく単語で責められるのは避けたいので、選んでもらうことにする。

「泡が多いほうでやっちゃって」

と、サンタクロースもお目にかかれないような期待に満ち満ちた瞳を煌かせるので、シャンプーが大サービスされる。バスルームはバスソープとシャンプーが混ざり合った、むせ返るような甘い芳香で溢れた。

繊細な羽毛をガビガビに固めている泥炭はなかなか落ちてくれない。彼女の指先は羽根を抜いたり傷つけたりしてしまわないよう、細心の注意を払いながら洗い進める。

「くすぐりたいです、ひゃふ、きゃおーう」

翼の付け根に触れる度、背筋を振って暴れられる。バスルームに

響く嬌声を隣人に聞かれたら激しい誤解を受けそうだった。幸いにして隣家は離れている。

「泡が入道雲のようです。なんて緻密なんでしょう。埋まりたいです」

スポンジの使い方を覚え泡作りに熱中しだす彼の羽毛には、頑固な泥の塊がしがみ付いている。指先でほぐしているうちに、彼女の内に嫌な疑念がそれこそ入道雲のように湧いてきた。

「この泥、乾いてますよね。乾いてから相当、時間が経ってるように見えます」

「お手数かけます」

「そうじゃなくて。もしかしてわたしが発砲する前から、すでに沼にはまってるんじゃない？ 銃撃されたフリして助けを求めたんじゃない…」

「…？」

「不覚です」

天使の雛は望みどおり、泡に埋められることとなった。

3 . 一つの背から 白い羽と黒い羽

溶けた泥でカカオ色に染まる泡を流していくと、現われた翼は新雪の降り積もった山脈か、その日最初の曙光を受けた雲海のように。

純白と言うより、あと一滴で白銀になりそうに透明な金を内包した白。北極熊の毛並みは白いのではなく、色素がなくて透明で、毛の内側で光が反射するから白く映るのだという。そんな趣の白。翼だけじゃなくて髪まで揃いの銀白だ。

「わあ、きれいな……る？」

感嘆は風切羽根の異変に塗り込められる。

シャンプーの間から変だと思っただけはいた。どれだけすすいでも流れない闇色は、沼の泥炭よりも遥かに濃く、翼の先端から下縁を鮮やかに染め抜いている。

「黒が入ってる……」

「僕たちの翼は聖性百パーセントで真っ白、魔性百パーセントで髪まで真っ黒になります。目も聖性が強ければ青、魔性が強ければ赤に」

天使にも悪魔にもなる雛は、心の清らかさで翼と瞳の色が変化するらしい。即座の反映を待ち構えているのか、白と黒の境界線は風呂ぎ切れない湖面のようにゆらゆらと移ろっている。

「あれだけわたしを騙したくせに、これじゃ黒の比率が低すぎませんか」

「僕は天使になりたいのです。悪魔になって人間の欲をせこせこ回収するのは重労働でイヤなんです」

「その発想がすでに悪魔寄りかと……っっていうか騙したの否定しないんですね」

「あなたの恋を食べたから、少しは聖性が戻りました。感謝します」
金の斧を落としたのに錆包丁を突き返されてる損失感。

「恋を食べるって、キスをすることなんですか？」

「キスごときで天使になれたら、世界は天使で溢れ返ります」

奪われた拳句、ごとき呼ばわりされたキスの被害者は惨めな気分
で閉口した。

「僕らは長年、Angels Shareで聖性を維持してきました」

聞いたことのあるその単語がスコッチ好きの父から聞いたものだ、
と彼女は思い当たった。

樽詰めの蒸留酒は熟成させている間に蒸発し、年に約二パーセン
トずつ減っていく。減るほどに美味となる酒はまるで天からの贈り
物。

だから蔵の人々は畏敬を込め、この蒸発分をAngels Share
hare 天使の分け前、と呼ぶ。

「あの芳醇なアロマが僕らを清め、天界へと導いてくれるのです…
…」

神の国を語るようにうつとりと夢見心地な青年は、酒が天使を作
っている衝撃の事実に幻滅中の聞き手に無頓着だ。

「ところが近頃は嘆かわしくも良質な醸造所が減り、天界は慢性的
アロマ不足に陥っています。そこで恋です。恋は人間の持ち得る限
り最も清澄で、神聖な」

慈愛を湛え透明な眼差しをした、天使らしい顔が見る者をどきり
とさせる。

「食糧です」

「やっぱり思考が悪魔寄りなんですね……。お酒と恋に同じ効果が
あるとは思えないけど」

「どちらも人を酔わせます。無上の幸福を、ただし度が過ぎれば死
をもたらすAqua Vitae 生命の水」

Aqua Vitaeはラテン語で生命の水。古い時代に薬とし

て飲用されたウイスキーの語源だが、説かれてみれば恋もお酒と似ていた。

「命を授かるという意味においては、恋こそがAqua Vita eの名に相応しいのでしょう。人間は生命の名を与えられた酒も及ばぬ甘露を賜わりながら、恋に破れて酒に縋る、不思議な生き物です」

「……そう、です……ね」

悪魔がまた手のひら返す。悪びれもせず人を罠にはめ、言葉で愚弄したかと思えば、美貌と清純で恋を語る天使になる。

反転を続けるティーカップに乗せられているようで、平衡感覚はミルクを吸ったカステラみたいに甘く崩れる。天使の無邪気と悪魔の魅惑をブレンドした笑顔で詩的に囁かれれば、彼女はもう頷くしかない。

「あなたの恋のアロマは純で雑味がなく、瑞々しくて、この上ない聖餐でした」

食べ足りない、と煌く紫の瞳で訴えられれば逃れようもない。泡の滑り落ちる腕が首に回され、美味称賛する唇の距離を回転木馬の速さで縮めていく。

「あなたは恋に縁遠く、アロマが有り余っているようなので。僕に食べさせて、その死蔵資源」

「一瞬でもフラついたわたしが愚かでした」

「もちろん、お礼はしましょう」

バスタブに背を向け出て行こうとした彼女のベルトを、青年は口調の悠長さに不釣合いな素早さで掴んで引き戻した。

「死後の天国行きを保証されても遠慮します！」

「代替資源提供ごときで天国を融通したら、天の不興を買います」

逃亡を切望する足は踏ん張って振り切ろうとするのに、一歩も前

へ進まない。

「離してください。帰ってください」

「全裸で空腹の僕が門前で泣き濡れていたら、あなたの一生の不名誉です。外道と後ろ指さされるあなたはとても不憫です……」

殉教者を悼むに相応しい憐れみの面持ちで首を振るのが、不憫な状況へ追い込もうとしている張本人。嚴重に抗議しようとした彼女の注意は、ふと気付いた視界の違和感へと向けられて原因を探る。

影の多さ。

青年の翼の黒い縁取りが、迫り来る不吉な夜のようにじわじわと白を侵食して登っている。あれが翼を食べ尽くし、髪をも染めれば、彼は魔界へ堕ちていくのだ。

ぞつとした寒気が腕から首筋へと肌を逆撫でしながら走り抜け、心臓の裏に居座って内側から冷気を吐き出し始めた。

「恋を食べさせてくれれば、幸いの知らせを授けます」

増殖する闇色から目が離せない。青年は返答の消失も背中の変状も感知せぬにこやかさで取引条件を述べている。

「たとえば、こんな知らせです。麓の駅前パチンコ店、四十五番台の釘が甘くなっています」

「世俗的な天使ですね……」

うごめく魔の色は、白鳥を食らう蟻のように、月を消す暗雲のように、彼の背を目指して進軍する。

「安心して。Angel's Shareが酒そのものでないのと同様に、僕らが食べる恋は恋そのものでなく、待機して熟成中の恋心の香りです。あなたが誰かに恋すれば、それは樽が開けられたという事。僕は新たな樽、新たな分け前を探して旅立ちます」

泥を落として息を呑んだ白。あと一滴で白銀になりそうに透明な金を内包した白は、宇宙のように濃い、それだけに温度のない黒に

退却を強いられている。羽の根元に近づくほど、闇は勢いを得て速度を増すようだった。

「ああそうそう。僕があなたを危険に晒すか、など不要な心配です。肉欲はワインの澱のようなもの。触れれば僕の翼には拭いがたい染みが残るでしょう」

「あの、背中……」

「そもそも僕があなたに恋するなんて不相当です、あなたがジャガイモに恋しないのと一緒にです。聞けば人間の中には猿とか馬を好む者もいるとか」

痛いほどに心臓が警鐘を打ち乱し、青年の柔らかな声をノイズが掻き消す。暗黒を抱く翼、魔性の赤に染まる瞳。微笑めば天使だった彼が墮ちようとしている。

天使になりたいのです。

「だめ、そっちに行っちゃだめ」

彼女がバスタブに駆け込むと、水滴と泡とが暴れて周囲を舞った。構わずに膝をつき、泡ごと彼を引き寄せる。

「使っていない恋くらい、あげますから……!」

「無理にとは」

「黙って」

悪魔にするのはしのびない、その一心だけ。

最初のひと触れは、思わぬ温かさに驚いたように互いが身を強張らせた。だが再び寄り添えば、もう迷いなく授受を繰り返す。重ねる唇のせわしさは、長い不在に耐えかねていた恋人のようである。

回した腕の中で徐々に青年の体から力が抜け、酔ったようにほぐれていくのを感じる。湯が静まり、ぬるんでもなお、泡の雲に包まれて彼は分け前を堪能していた。

天使の雛はシャンプーの香り。

幸せそうな吐息が満腹の合図か、彼女が目を開ければ翼は僅かな縁取りを残して銀白に輝いていた。

「盟約成立。不履行は魔界へ不返の流罪、です。……はい、メシ確

保
」

極上の微笑で宣言された瞬間に翼の黒が一段増えたのを、暴言が聞こえたのを、彼女は精神衛生のために錯覚ということにした。

4・いつも背中が開いた服

袖が短いとか襟が落ちていたりとか、それより彼女の父のシャツが青年に合わない最大の理由は羽であった。

「着てた上着、一体どういう構造してたんですか」

「手が二本です」

「得意気に申告するほど驚きの事実ではありません」

「先程までいちいち驚いてくれたのに不発です……」

結局は前後逆に羽織らせ、ウエスト間際のボタンだけを翼の下で留めるといふ力技に打って出た。ぶかぶかのズボンをベルトで締めたら皺だらけだし、裾は足首どころかふくらはぎまで覗いている。

実に情けない姿だが、裸がデフォルトと主張する天使及び悪魔の雛は気にしていないように見える。ふんふんとしきりに空気を嗅いで首を伸ばし、廊下の方へ出たいようだ。

「外に出たりしないでくださいよ？ 羽付きな上にそんなおかしな格好なのを見られたら、二人まとめて隔離……」

そんなおかしな格好が壁をすり抜けた。

「わーっ、嘘ーっ！ え、えーっつと、この壁の裏つてどこだっけ」

中庭だ、と小さく叫ぶ。廊下を走り、部屋を抜け、つまずきながらようやく中庭へ辿り着いた彼女の目の前で、羽付きの背中は別棟の壁をすり抜けて消えるところだった。

「ここまで来たのに！」

慌てて取って返して問題の部屋に入ろうとしたが、ノブが回らない。

「鍵、鍵」

真鍮の鍵は逃走劇を楽しんでいるのか天使の味方なのか、震えてなかなか言うことを聞かない。焦って乱暴にして鍵穴に傷が付いた父のしかめ面が彼女の脳裏をよぎるが、ご近所の評判に修復不可能な傷が刻まれるよりマシだ、と罪悪感を一蹴する。

ようやく中へと転がり込めばお尋ね者はバーカウンターの上でちょこんと膝を揃えてしゃがんでいて、まるで大木の枝で律儀に卵を温める親鳥のようだった。だが嬉しそうに抱いているのは、卵でなくスコッチの瓶。

「ダブル・マチュアード……大好きです」

ふんふん嗅ぐ彼をうつとりさせているのが未開封だった父の愛蔵ボトルと知って、彼女は手痛い臨時支出を覚悟した。

「無断で壁をすり抜けないでください。お酒を盗まないでください」

「天使が降りて来るのに煙突で四苦八苦してたら不様です。北欧の太っちな聖人と同一視は心外です」

「天上から降りて来るならまだしも、歩いて抜けられるのは激しくイメージ損壊です。じゃなくて、もしかして町の酒屋を荒らした空巣ってやつぱり」

「Angel's Shareでなくてもスコッチのアロマが恋しくて……人間における煙草のようなものです」

酒屋荒らしをかくまった罪まで負わされることになり、彼女は頭痛を覚えてこめかみを押さえる。

その手首をそつと掴む手があった。

包むように優しく、なだめるように温かな指にびくりとした彼女が顔を上げば、銀髪の間からサファイアのごとき奥行きを湛えた瞳が見下ろしている。サファイアが天国の石と呼ばれる理由を納得させる、深いのに澄んだ色。

穏やかに微笑む唇からは、熟成されたウイスキーの洋梨に似たアロマが零れてくる。

「でもあなたのアロマの方が、遥かに生命です」

天使の囁きはスコッチの陶酔。

「広い部屋……祭壇がないとは、教会にしては不真面目です」

雰囲気に吞まれてつい食事をさせてしまった彼女の指先は唇をなぞって、滑らかな熱とスコッチの残り香を持って余っていた。

恋人同士なら困らないのに、会ったばかりでキスした後何話を話せと言うのか。温かい唇の余韻を収めながらうまく会話を切り出せずにいると、そうと察したのか鈍いのか、当惑の元凶は室内を見渡しながらのんびりのたまった。

「ここはレストランです。父はジビエ料理のレストラン経営者なの。オフシーズンは閉めてあるんだけど、わたしは避暑で一足先に来ていて」

「ジビエ？」

ジビエは狩猟して食する野生の鳥、鹿、兎などのこと。シーズンは秋からだ。

純粹な野生・ソバージユだけでなく、一定期間の飼育の後に放したり野生を餌付けるデミ・ソバージユ、自然の森に網を張って飼育する半野性のエルバージユもある。

彼女の父は業者を雇い、レストラン裏の敷地でデミ・ソバージユを行っていた。

「沼にはまつてる時、見ませんでした？ 鴨とか雉とかうずらとか」

「はまつていただなんて。あなたに撃たれて」

「騙されませんってば」

「……鳥を料理する部屋と理解します……早まったようです」

ひそりとした呟きを落とし、有翼青年は白黒の羽を小さく折り畳んでふるふるしている。

「屋根に鉄の鳥がいたので、鳥フレンドリーだと思ったんです」

レストランの青屋根に立つ風見鶏にあらぬ期待を寄せていたらしい。幼い勘違いに彼女の胸は温まる。

「そういう意味じゃ……だって牛の看板を掲げている肉屋に牛が寄つて来ますか？」

「掲示が捕食や反目の証なら、教会の十字架は不敬です」

温まった三倍分の体温が彼女の胸から脱走した。

「鳥を食べるということは、あなた方は鳩やカラスも」

「鳩は食べますけど、カラスは食べません」

「悪魔びいきです」

責め口調で詰め寄られるに至って彼女は、鳩は天使に、カラスは悪魔につきものだと思いついた。

「うーん、単にカラスがおいしくないだけかと思いますが」

「僕の前で鳩は撃たないで。天使の先輩方の心証が悪くなります」
「どこまで利己的なんですか……」

昼間からスコッチの香り漂わす放蕩青年だが、一方で鴨の幼鳥のように従順に、ランドリールームまでてくてくと彼女の後をついてきた。途中、壁をすり抜けて近道したそうにする度に厳しい制止を受けながら。

「泥だらけの服、洗濯してあげますから。乾いたらそれ着て帰ってくださいね」

「盟約不履行は魔界へ不返の流罪です」

「いつまでキスを搾取する気ですか！ 家はないんですかつ」

「恋のアロマを食べてるだけです。巢は、日照と通気性を考慮してあの辺りにします」

と青年が指差せば、リビングの一隅から勝手に家具が退去した。

「居つくんですか！」

「人間の家は直線ばかりで不恰好です。クッションや枕を持ってきて。巢というものはふわふわでまふまふで」

洗濯、一刻も早く洗濯、と呪文のように繰り返しながら彼女の手は泥にまみれた彼の服をかき集める。

シャツらしき泥の塊にシャワーを浴びせてみると布地の妙な少なさに気付く。広げれば一目瞭然で、シャツの背中には大きな穴が作

られていた。

上質なイタリア製の生地は背中部分で惜しげなく切り抜かれ、縁は手縫いで丁寧まつられていた。迷いのない端の始末は、このシャツが初めての羽用加工でないことを物語っている。

彼のために幾枚も上等なシャツを買い、背中を開けてやった人がいる。

その人は彼に恋のアロマを与えていたのだろうか。服を買い、縫ってあげて、一緒に暮らしていたのだろうか。そうさせるほどの何かが彼にはあるのだろうか。心の籠もった縫い目が彼女の好奇心を優しく煽る。

だとしたらなぜ彼はそんな居心地のいい人のそばを離れ、裏の沼地なんかに落ちてきたのだろうか。

Curiosity killed the cat. 好奇心は九つの命を持つという猫さえ殺す、ほどほどにせよ。という諺が胸中を舞う。その好奇心は別の諺を掘り起こしてきて反論を試みる。

A cat has nine lives and a woman has nine cats' lives. 猫は命を九つ持ち、女は猫九匹分の命を持つ。女は逞しい。

「おまけに猫にはない知性も持つてる」
知りたくなつた時点で盟約はもう、成されたも同然。

理由の後付けは人間だけの得意技だし、と彼女は思索の終わりにひとつ肩をすくめて、リビングへ声をかけた。

「名前を教えてください。わたしの名は」
「名乗るなんて不注意です」

大きなクッションを抱えて出て来た彼は、空いている手で翼の黒い羽根をつまんでみせた。

「僕は悪魔の雛でもあるんです。真の名を教わったら、あなたをそのかしてどんな契約を結ぼうとするか……責任持たないよ？」

今まで散々騙してきた悪魔の雛が、わざわざ警告を発している。酒と恋のアロマで聖性に傾いているからなのか、それともよほど危険な注意だからなのか。

猫九匹分の命を持つとも、魔性にかかれば鼻先で軽く吹き飛ばされそうだった。猫にはないアドバンテージの知性も、この分ではさしたる役に立ちそうにない。

早くも後悔が渦巻くが、不返の流罪発言が一気に真実味を帯びてきたので引くに引けない。彼女は知らず乾いていた喉をこくりと鳴らした。

「ええと……なら、そちらの名前を」

「お好きなように名付けてください」

名乗りあうだけのはずが、ややこしい話に。

「僕にとって僕の名は不要です。必要とするあなたが好きに決めちゃって」

自分で自分の名を呼ぶことはないから何でもいい、という理屈らしい。マイペースを悪気なく貫かれる迷惑を教えねば、と彼女は意趣返しを企む。

「じゃあ……沼に落ちてた人」

「不服です」

「好きに決めると言っときながら選り好みするんですね」

「せめて、あなたに撃たれて沼に落とされた空腹で哀れな天使の雛と」

吐息一つで散り落ちる繊細な花卉のように儚げな様子割に、言うことは抜け目ない。仕掛けた意地悪以上の重量で返された疲労は、彼女に抵抗を諦めさせた。

「ディアジェ、とか」

ぱっと輝いた青玉が気に入ったと雄弁に語っていた。

「はい。ではあなたにも名前を授けましょう。だって名前をもらっ

たんですから、名前を返すのがギブ・アンド・テイクというものでしょう」

「取引条件にうるさいのは悪魔だけかと思ってました」

「実を言いますと、会った瞬間から決めていたんです」

青年　命名ディアジエは、満点の答案を母親に見せようとする子供みたいに上気して、手にしたクツションをわふわふさせている。

「あなたの名は、シエリ。ぴったりでしょう」

Cherie　愛しいひと。

出会いの瞬間に決めた名が、愛しいひと。

「あ……」

反射的に胸を押さえ、彼女は思った　こんな勢いで温かいものが溢れ出してしまったら、魂まで持って行かれそう。

掌に伝わってくる鼓動が騒がしい、だからと言って静かにさせたくはなく。呼吸の届きそうな近くに天上の笑みがあるのに気付いて、彼女は静かに息を詰める。

微笑の形を崩さずに、ディアジエの唇が吐息だけの言葉を紡いだ。

「なにしろ、あなたは僕のアロマですから」

「……え？」

アロマ、というお酒に馴染み深い単語が彼女の心拍数に待ったをかける。

Sherry、シエリー酒。スコッチの熟成に使われる樽はシエリーやワインの古樽だ。すなわちAngel's Shareを生み出す樽。ディアジエにとっては食料製造工場、兼、保管庫。

「この……貪食天使！」

「の、雛鳥です」

天使がくれたのは樽の名前。

5 ・ どれだけ羽撃いても 鳥のように飛べなくて

ねえ、お願いよ。

わたしの命が終わる時、あなたが迎えに降りて来て。

穢れなき純白の翼で、聖なる御手で、わたしを天へ連れて行って。

約束よ。

約束よ。

5 ・ どれだけ羽撃いても 鳥のように飛べなくて

「どうにか騙しおおせたつてとこだな 『ディアジエ』？」

愉快さに少しばかりの冷ややかさを取り混ぜた低い声は、含み笑いと持ち主を伴って床から不意に湧いて出た。テラコッタのタイルを水から上がるようにするりと抜けたかと思うと、瞬きの後にはその上へ寝転ぶ。

「たどたどしくて目も当てられなかったけどな、笑わせてもらったさ。あーあの泡、ありゃ本気でじゃれてただろ。まったく呆れたもんだっての」

毎度の事ながら挨拶抜きに来訪だった。枕とクッションで建設途上の新たな巣を、悪趣味だとはつきり顔に書き出しつつ眺め回している。

ディアジエの手は近くにあって枕をもぐら叩きの要領で不躰な訪問者にぶつけた。

「やはりリユシアン……雛鳥の奮闘を窓から覗く悪趣味な悪魔は、君くらいです」

「他に誰がいる？ おまえを墮とす楽しみは、魔王様にも譲れるか」
ぞんざいに枕を投げ返す黒衣の客は薄く笑う。

バスルームを見下ろす梢で欠伸していた三つ目のカラスは本来の姿に戻っており、艶やかな黒を湛えた羽をゆっくり畳んだ。ディアジエのものより一回り大きく長く、飛ぶという実用を為す。それが地中であつてもだ。

「追い払われない程度に嫌われようと必死だつたな？ ご苦勞なこつて、悪魔なら犯すだけで終了。至つて簡便な快樂。諦めてここいらで墮ちてしまえ、俺のようにな……おお怖い」

睨まれて、正真正銘の悪魔はルビーより燃える瞳を楽しげに細めている。零れ落ちてくる黒髪を面倒そうにかき上げれば、魔界の住人特有の尖つた耳が何連ものピアスを重そうに揺らした。

「そそ、その調子。睨め罵れ怒れ嘲笑しろ、魔性という紅蓮の火に薪を投じろ。ふん……いつまでもしぶとい奴。せいぜい足掻くことだ、そう、今度の『シエリ』にも愛されたりしないように」

「ご心配なきよう。シエリが折れた理由は好意でなく興味です」

「これはまた学習していなくて嬉しいぞ、ディアジエ。幾人のシエリを失おうとも解らずにいてくれな。そして『天使になって、私が死んだら迎えに来て』というお決まりの約束を踏みにじり続けてくれ。……んー、そう言や」

いたずらに痛みを煽っていたリュシアンが唐突に話題を変える理由を、ディアジエは長い長い付き合いで知っていた。

リュシアンは天界に昇れずにいるディアジエの姿を面白がっているに過ぎない。実際に魔界へ墮としてしまえば、リュシアンはディアジエに対する一切の興味を失うに違いなかった。だからディアジエを痛めて魔性に染め切つたりはしない。

要するにディアジエは、食べる気もない猫に爪で転がされている蝶のようなもの。

「アロマの報酬は取り決めたのか？」

午後四十五番台、と眩きながら出掛けたシエリの財布は、夕方に大幅な軽量化を施されて戻った。釘の甘さもビギナーズラックも、ギャンブル経験のなさをカバーできなかったようだ。涙目の抗議を

受けたディアジエはおやつをねだり損ねた。

「金輪際ギャンブル系の知らせは遠慮するそうです。ですからアロマのお礼はツケにしちゃって、って言っときました。シャワーを知らないくせに、何処で覚えたんですかそんな単語　とか脱力してましたっけ。あれでなかなかに切り返しの鋭い女性で……」

「おいおい、ディアジエ？」

研ぎ澄ました黒炭で引いたようにすらりと流麗な眉が上がる。光り物を見つけて物にしようと思ひ立つカラスの様相で、リュシアン
の比率の長い手が広げられた。

「饒舌は悪魔の専売特許というのに。どうしたどうした、餌に惚れたか？　こいつは滑稽、ジャガイモに恋はしないなんて牽制しておきながら」

深紅の瞳でたぎる炎が一瞬、そうと知る者でなければ読み取れない極小の幅に揺らいだのを見逃さなかった。次いでディアジエの視線は悪魔の翼に一本だけ白く輝く羽根へ流れる。

リュシアンが天に背いてまで溺れた女性は、雛鳥の墮落をそそのかしたとして人の形すら残されなかった。魔界の隅で意思もなく蠢く肉の塊にされたと聞いたかつての彼の女神。その隣へ崩れるシエリの虚ろな瞳を想像して、ディアジエは無言のうちに首を振る。

沈黙に己にまつわる悲しみの匂いを嗅ぎつけたのか、リュシアンは迷惑そうに顔を逸らした。

「面白くもない。おまえの性質は悪魔向きのはずだろ、ディアジエ。そんな目をされる覚えは……ディア、ジエ？　そっか『ディアジエ』か。いいね、今度のシエリは悪くない」

急に背を丸め翼の先を震わせて、悪魔が忍び笑いをする。

「傑作だ。聞きたいか？　聞きたいな？」

彼らはこうして気を持たせるのが好きだ。別になどと答えようも

のなら、たとえそれが相手の生死に関わることであろうと、笑ったまま何も言わずに飛び去ってしまう。

諦念と共にディアジエが素直に頷けば、ルビーの瞳に満足そうな明るい色が射した。爪の伸びた指先がテラコッタの上へ文字を綴ると、軌跡が細い炎となってインク代わりに留まる。

「悪魔の Di a b l e と天使の A n g e の前後を繋げて出来る名だ。悪魔が先に立っている。悪魔の頭に天使の身体。うまくおまえの性質を言い当ててるぞ」

「あつ？」

『沼に落ちてた人』の次に提示されたまともな名前について飛び付いた自分の浅はかさを知って、ディアジエは額を押さえる。これがリュシアンを喜ばせてしまったらしく、ばたばたと羽を打ち鳴らしながら笑っている。

「我が旧友、そうでなきやおまえじゃない。飛ぶな、永遠に飛ぶな。潜るのも許さない。どれだけ羽ばたこうとも鳥にさえ及ばぬ無力さに、おまえの心を食わせるな。俺を喜ばせてくれ、なあ、無尽蔵な人間の欲などとうに食い飽きた俺の慰みを、取り上げたもうな」

「……僕は必ず天へ飛びます」

どうかからかわれようとディアジエの内には、この悪魔を追い払う気も憎む気も起きない。むしろシエリを乗り換える度に嘲笑しに来るリュシアンがいなければ、白い羽根の重さに耐えかねて魔界へ身を任せていたかもしれないとディアジエは思う。

「なにしろ今度のシエリのアロマは、ヴィンテージの A n g e l s S h a r e も恥じ入るほどです」

まあなあ、と悪魔が同意の印に唇の片端を引き上げると、鋭い牙が覗いた。

「認めてやるさ、掃き溜めの中にしちやまともな餌だつてな。恋してない、かといって失望もしてない、雛好みの熟成加減。ディアジエの名にふさわしく、恋心を生かさず殺さず……存分に飼い殺すことだ、最後の一滴を搾り切るまで」

「ノックくらいしてください！」

「あなたは僕を突き落とすのがお得意です……」

「自業自得です！」

しみじみ見入らされた健やかな寝顔は跡形もなく消失し、シエリの眉間には猛々しいアルプス山脈が隆起していた。おまけにその手は枕の下から拳銃を召喚中。

「禁猟期間です、シエリ。空砲で脅すのは無意味です」

「護身用は年中無休！ しかも銀の弾丸籠めてありますからっ」

「悪魔ならまだしも、天使の雛鳥に銀の弾丸は無効です。お腹が空いたのですが、眠っているあなたを起こすまいと気を遣ったというのに誤解です……チツ、寝てる間に食ってしまっただけ」

「銀の弾がものすごく効きそうな発言をしませんでしたか」

悪魔のリュシアンが潜って帰って行った後、ディアジエは天井を抜けて乙女の寝室に侵入していた。

なぜ無粋で硬質な平面と直線で、人間は住む場所も行く道も限定してしまうのだろう、とディアジエは思う。自由に通ると叱られてしまう。人が困う空間は立ち歩くには困らずとも、羽を広げるには不適當だ。

きつと人間は直線を覚えて羽を忘れてしまったのだ。そう、蛇がそのかしてアダムとイヴに食べさせた林檎の実は、ニュートンを使って万有引力の法則なんて味気ない定式で、天の創った世界の秩序を暴かせた。その報いかもしれない。

そんなことを考えながら寝顔を眺めていて小腹が空いて、夜食を頂こうと屈み込んだところで、タイミング悪く夜食が目を見ましました。

有無を言わずベッドから突き落とされ、ノックしろと怒鳴られて今に至る。

「食べ足りない」と魔性が疼くんです……」

間にふわふわの寝具が無かったら、突きをまともに受けていただろう。身を挺して衝撃を吸収してくれた柔らか寝具を巢材に欲しくて、掴んでずるずる引きずり落とす。

が、シエリは変質者を見る目でディアジエの額に銃口を押し付けてきた。ごりごりと険悪な音が脳内経由で聞こえる。銃身が概ね黒なのは、生命を奪う魔性の道具だからかもしれない。とディアジエは納得してみる。

「お取り込み中申し訳ありません。銀の弾丸を撃ち込むなら、脳より心臓がお奨めです」

「誰のせいで取り込んでるか分かってますか」

「ギャンブル以外でお礼はします。かつて先輩は助けて頂いた返礼に機織り部屋に籠もり、自分で羽をむしって反物にしたそうです」

「う……そうでした鶴の羽根も白地に黒……」

あれも怪我して動けなくなつてたのを助けられた話だったような、まさか雛鳥には詐欺マニュアルが、と絶望的な顔付きで呟くシエリの銃からそつと額を離す。銃口へ掌を差し伸べると銀の弾は砂になつて零れ落ち、煌く小山を形作る。ぎゅつと握ればたちまち細かいチエーンに姿を変えた。

「ううん、羽根入り生地なんてもらつても困ります」

はつとして詐欺疑惑追究から戻つたシエリが拳銃を握り直したあたり、弾が抜き取られた事に気付いていないようだった。

「今のご時世なら羽毛寝具かダウンジャケットね。あ、ちなみにこれ羽毛布団。天使の雛を一羽使つたら、布団は無理でも枕くらいは……あ。ごめんなさい、そんなに鳥肌立てて震えなくても。ついでうか反物とか言い出したの、ディアジエでしょ……」

鳥肌を出したくらいで銃を引つ込めてくれちゃうシエリには、黒

い羽の害虫が不安です と、ディアジエは親心なため息を一つ。白い羽根をぷつんと抜いて銀のチェーンに挿す。

「これをあなたに差し上げましょう。着けますから後ろを向いて」「ネックレス？」

首輪です、と内心だけで訂正を入れておく。

「わあ、きれい……でもまさか宝石店で空巣した獲物じゃ……」

「疑惑は不当です。とはいえ、半分は頂き物と言えます」

なおも疑うシエリだが、繊細なアクセサリーに既にご執心なのは鎖に触れそうな鼻先が物語っている。どうか僕を助けると思ってもらってください……などと言いくるめ、後ろを向かせた。

羽根を挿したネックレスはアンテナ代わりだ。シエリがどの方向にいるか、悪魔に邪なちよっかい出されたりしていないか程度は察知できる。

巻貝をシエードにしたランプは電球から天然に近い色彩を選び分けて、部屋を遅い夕焼け色に染めていた。片手で髪を上げて露わになったシエリの首筋も、優しい暖色の恩恵を受けている。

首輪を嵌めようとしていたディアジエの手が止まった。

視線の軌道は滑らかな首筋からうなじへと誘われ、柔らかそうな産毛に踊らされて、ふっくらとした耳朶を経由して頬へと渡って行く。その質感と体温は視覚以上に指先で確かめずにはいられず、ディアジエは暗さを言い訳にネックレスの連結にもたついた。

「シエリ。僕に出来る最大の礼は、あなたの命が終わる時、あなたをきちんと天国へエスコート」

「お断りします」

「……することですが、魔界がご希望ならきちんと逝かせて差し上げます」

「魔界も、ディアジエみたいな胡散臭い天使も願い下げです！ 天国くらい地獄くれれば自分で行くから！」

銀の弾丸を撃ち込まれた魔物が砂になる瞬間ってこんな感じですよ
ディアジエは意識が砂になって毛穴という毛穴から漏れ出して

しまった気分でフラついた。

「不可解です。僕はこれでも何人も女性にご指名頂いてきた身なのに、殺生です」

「そんなんだから、いつまで経っても天使になれないんじゃないですか？」

「言葉が銀より効くとは……僕は、僕はあなたのためを思ってたのに非道です……くそ、そろそろ泣き真似が通じない」

「泣き真似の見抜き方が分かりました。嘘ついていると羽の黒が増えます。それに」

ディアジエは目を逸らしつつ、出来るだけ小さく羽を折り畳んだ。

「わたしのためを思って？ 誰かのためにとか、悪魔は重労働だからイヤだなんて消極的理由の雛鳥、わたしが天でも認めませんっ」

「シエリ……」

スコツチの Angels Share でなく恋のアロマで代用するようになってから。恐らく自分も人間の直線に囲まれていたのだ。とディアジエは悟った。『シエリ』のために天使になるべきという直線の人道に。

折り畳まれた翼の奥でも、嘘に増えた分の魔性が聖性に追いやられ、羽根の先端から霧散していくのがはつきりと知覚できた。

Angels Share も恋のアロマも摂取していないのに魔性が消える初めての感覚に、ディアジエは戸惑う。戸惑うが、あまりに清浄な後味は何らかの奇跡が起きたことを示唆しているように、素直に流れへ身を任せる。

Water、と体内の奥底で誰かが叫んでいる。

生命の水、Aqua Vitae、無上の幸福をもたらすもの、人間の持ち得る限り最も清澄で、神聖な。それが無数の金色の光の粒となって降りて来たのを、ディアジエは陶然として眺めていた。「今まで……誰一人、そんな風には……誰もが僕に必ず天使になれ、と」

「いえ、えっと。悪魔になれって言うてるわけじゃ……」

恋のアロマは香水のようにほわりとシエリの身体から立ち昇る。人間にとってはフェロモンに等しいアロマで、天は雛鳥たちを試すのだ。恋に恋して恋人を捻出する患者のように、アロマに眩んで身体ごと頂いたりしないかどうか。

無上の幸福を、ただし度が過ぎれば死をもたらす Aqua Vita。本能は薔薇色に弾けて咲き誇る、だが眠らせておけば鈍色の幸福で足りたのに。

試練を受ける身を痛感しながら、ディアジエは腕を伸ばしてシエリの細い身体を抱き込んだ。

「聞いてシエリ……アロマの摂取法が唇へのキスだけとは不便です。キスはキスでも、あなたの開口部から受け取れます。そう、例えばこことか……」

「きやつ？」

囁きを落とす耳へ唇を押し当てれば、シエリのしなやかな身体が腕の中でびくりと跳ねる。

「それから、もっと下……とか」

どうするシエリ、逃げる？ それとも二人揃って墮ちちゃう？

ディアジエは翼を広げてシエリにもう一周の拘束を重ねる。

だが不意に胸を押し潰す、経験したことの無い冷たく痛い感触にディアジエの腕は緩む。目を落とせば痛む胸には、銃口がぐりぐりと押し付けられていた。

銀の弾丸はシエリの首輪に変わって空砲なのは知っていても、殺気と銃口を差し向けられるのを普通は悦ばない 魔性に浸かった者以外は。

「恥じらいが染めたあなたの頬はこの世の眼福……痛いです誤解です。鼻です、耳より下の開口部といえば鼻です」

「耳と鼻はほぼ同位置です！ それに羽がすごい勢いで黒くなっただんですけど！ 絶対、いかがわしいこと考えてたでしょう！」

「天使における清廉を貫けば人類は死滅します」

「人じゃないくせにー！」

魔性が疼く。意識へぼつり、ぼつりと血が滴るように赤い色が落ちてきて、病原体のように増殖していく。あれに心を食われたら、僕はシエリを、リュシアン女神と同じ場所に　それだけは、と低い呟きは他人の声のように遠くから聞こえた。

「ねえシエリ……恋は忘れちゃって」

清纯の証であるラズベリー色の頬をそつと両手で包み込むと、警戒に塗り潰されていた瞳がぐらりと揺れた。同時に銃口はおずおずと身を引いたのに、ディアジエの胸には冷たさが居残っている。

「あなたが恋をしたらアロマがなくなつて、僕は、あなたのそばには……」

「ディアジエ……？　やだ大丈夫？　苦しそうな顔してる……」
「いただきます。」

と、ディアジエは内心きちんとお礼申し上げて夜食のキスを満喫した。

6・部屋の中で広げるな

『ボンジュール、パパンだよー！ 私の鴨たちは元気かな。昼前に寄るから待ってておくれ。むちゅっ』

湿ったキス音つき録音メッセージは眠気を根こそぎさらっていった。渾身の力で受話器を叩き付ければ無かったことに出来そうな気がして試してみるが、父の朗らかな伝言は無情にも繰り返された。シエリはレストラン棟から飛び出す。夜中に侵入して安眠妨害していった寝坊の元凶、彼がせつせと建築した巣へ走り込んだ。

「ここ片付けて、隠れてて！ もうすぐパパが来る」

「んー……あ、おはよう、シエリ」

恋人と初めて迎えた朝のように、眩しげに優しく緩んだ目元が見上げてくる。家中からくすねたらしいクッション類に埋もれていた天使の雛は、夢うつつなまどろみの瞳でシエリの腰を抱き寄せた。ディアジエの欲しがる唇を、シエリは海老反りで回避する。

「朝食の給餌に来たんじゃありません！」

夏空も敵わぬコーンフラワーブルーの瞳がさつと曇り、夕立を降らせそうに潤んだ。

「おはようのキスは親愛の挨拶なのに、淡白です……」

「あつ。ごめんなさい……」

いじけた指先がテラコッタのタイルにチキチキと禍々しい模様を描き出す。

「もういいです。シエリなんて魔界へ逝っちゃって」

「きゃーやめてー！ 黒板引っかき系の音っ」

ごめんなさい、と重ねて謝って頬に落とそうとしたキスは、受け手の僅かな動きで着地点を唇にすり替えられた。冷たくされた仕返しなのか、ごく軽く噛んでくる食べるようなキス。

朝の挨拶にしては情熱的な口付けは、年頃の娘の意識から棘を奪っていくにはあまりに効果的だった。とろりと心地良い重さを含ん

だ瞼を上げれば、満足気なディアジェが微笑んでいる。

「ごちそうさまです」

「やっぱり食事だったんですか……」

「衣食足りて礼節を知る、です」

クツシヨンでべふんと叩かれても、ディアジェはきよとんとして避けもしない。

「満腹でも礼儀を知らないくせにっ」

「衣服がまだですから」

コンコンコンコン、と休戦を告げるゴングのタイミングでドアノッカーが来客を告げた。お届けものでーすと呼ぶ声がある。玄関へ出たシエリに、宅配業者は代金引換だと言ってイタリアの紳士服ブランド名が印刷された箱を掲げた。

「ディアジェ宛て……？ ええっ、高っ」

金額に驚くが、要らないと突き返しても業者を困らすだけ。涙ながらに支払ったシエリそっちのけで、ディアジェは包装紙をベリベリ破いて散らかしている。

「きゃっふーい。美しい包装を破くと、とっても悪いことをしてるスリリングな気分になります」

「あー分かるそれ……じゃなくて、払ったのわたしなんですが！」

「四十五番台でしくじらなければ、安い買い物だったはずです。良き知らせを無駄にしたあなたの失態です」

ものすごく冤罪を着せられてる気分になるのはどうしてだろう

とシエリは殺意さえ覚えながら思う。こめかみを押さえて自分をなだめていると、耳にジャキジャキぱちんとやけに軽快な音が邪魔してきた。

見れば頭痛の種が真新しいシャツの背中に鉄を入れ、ちくちくと手慣れた運針で布端をまつっている。

「ディアジェが縫ってたのっ？ 沼にはまつた時に着たシャツ
！」

「はい。ズボンの裾上げもドンと来いです」

「誰かが縫ってあげたんだと思ってたのに。服には気を遣わないんだと思つてたのに！」

「人間がいちじくの葉で済ませてくれるなら、僕もそうします」
涼やかに言い放つムツシュ責任転嫁に、こればかりは言い返せなかつた。有翼青年用シャツは女性の深く細やかな愛情の手仕事と誤解してディアジエを受け入れたのはシエリ自身だ。無断で巢材に利用されていた父からのプレゼント、鴨のぬいぐるみの首を絞めつつ我が身を呪う。

完成です、という宣言と同時に着替え始めるディアジエの脱ぎっぷりは相変わらず大胆で、シエリは慌てて部屋の外へ逃げ出した。そこへ耳慣れた排気音がやってきて玄関前で最後のひと唸り上げ、ふつと静かになる。そして接近するどすどす豪快な足音にシエリは青くなつた。

「パパン参上ー！ おやどこに隠れてるんだ、私の娘は？ おーい」
「きゃーっパパが来ちゃった！ ディアジエ何とかして、羽も巢も部屋の中で広げないでください、そうだマントを羽織るとか」

「一、真夏に時代錯誤なマントを羽織つた男が部屋から出てくる。
二、天使が棲みついている。さあ好感度が高いのはどっち」
「都合がいい時だけ『雛』を省略しないでください！」

シエリが背中中で張りつくドアの向こう側は、がさごそのんきな身支度を続けている気配。

「ご心配なきよう、僕に秘策があります」

人間の皮を被つた熊、と密かに評される筋肉質で毛深い父は瞠目して立ち尽くす。対するディアジエは自ら仕立てたばかりのシャツとズボンを着こなし、白多めの翼を優雅に開いて慈愛の微笑を湛えている。

そしてゆっくり差し出したのは、天の御子かのように大事そうに

抱いていた スコッチファン垂涎、幻の最上級ウイスキー。

「初めまして。お嬢さんは僕が頂いちゃいました」

「……………！」

カツ、と音のしそうな迫力で父の目はもう一段見開かれる。シエリは、痴れ者めがー！ と鉄拳を繰り出す父を確信して身を縮めた。が、次の瞬間に男二人はがっちりと握手を交わして抱き合い、ばんばんばん！ と背中を叩き合つて意気投合した。

「メルシーボクウ！ 何とめでたい日か、私の天国行きは確実だ！ 我が息子よ、この美酒で祝杯をあげよう」

「ちよつとパパ、娘の身柄と天国とどつちが大事なのっ」

「ワンウェイチケット トウ パラダイス！ 天国シルヴブレ！」

「ありがとうパパ。これで心置きなく恨めます……………」

飲む父と嗅ぐ天使での酒盛りが賑わう隣で、シエリは呪詛を呟く。今まさに開栓され酌み交わされているスコッチが、空巢に遭う前の酒屋にうやうやしく飾られていたのを見ていたからだ。

「おおつと、いかん、雨が降ってきてしまったぞ。明るいうちに妻の墓参りへ行くつもりだったのだが」

ボトルが空に近くなつた頃、窓ガラスにはたばたと透明な小花を咲かせて雨が落ちてきた。遠くないとはいえ、墓地のある見晴らしのいい丘までの小道はぬかるむと厄介な相手だ。

参つたなあと酒臭いため息をつき、それから父はふと酔いの醒めた目を天へ向けた。

「人というのはなぜ、愛する者が天に召されるのを願いながら、その体を土の下へ埋めるのだろう。地上より天に遠く、天を臨めぬその場所へ」

「パパ……………」

「なーんてな、ふはは！ どうだパパンのブラックポエム」

酒屋の店主に密告したい激しい衝動を、シエリは深呼吸で迎え撃つ。佳人薄命と嘆く父こそが母の早世の原因ではなかったか、と疑いたくなつた。

疑念はキューイと軽い金属音に断たれ、顔を上げればフランス窓が開いている。見えない手で押し開けたらしいディアジエが庭先へと進み出て、掌に受けた雨粒を捧げるようにそっと掲げた。その姿は空を支える天使そのもので、シエリは知らず息を呑む。

「急ぎ足の雨たち、もう少し空に留まっておいで。そこは天に近い、生きとし生けるものすべてが羨む場所です。……無論、この僕も」

雲より遙か上を望む遠い遠い瞳に籠もった愛おしさと憧憬は、シエリの胸の内に小さな暗雲を呼び起こす。

「おおつ、雨が止んでいく。メルシー天使くん、どれ一丁行ってくるかな」

「雛。雛だから、パパ……」

「お気をつけて行ってらっしゃいませ」

墓参にはいささか不届きな、体重に加えてアルコールによる愚鈍さの増した重たい千鳥足で父は出かけていった。

嵐を呼ぶかと思われた父とディアジエの面会はあまりにあっけなく解決し、緊張は疲労に取って代わる。ソファに埋もれながらシエリは脳内の処世術手帳に一行書き足す 損をするのは損を感じる者だけなのだ。

降り始めの雨滴が舞い上がらせていった土と草の香り、蝶さえ捕らえられないその上昇気流に乗るようにディアジエの前髪が風に踊っている。

「わあ、雲の切れ間に覗く空は何て青いんでしょう」

空を仰ぐ時、どこに焦点を合わせれば天が見えるのだろう。人はそれを知らない、あるいは忘れてしまった。ディアジエの瞳には映っているのだろうか そう思っただけ眺めた横顔で妖しく光る、明け方の空のような紫。

「ディアジエ……魔性気味みたいですけど」

「喜びましょう。贈賄完了、懐柔成功です。そうそう、雨上げはシエリにツケておきます。僕としてはパパンよりあなたに貸しを作っておいた方が有利です」

「天使より悪徳政治家の方が向いてるんじゃないでしょうか」

「褒めてもツケの相殺はなしです」

にっこりと非の打ち所がない微笑は馬鹿なのか、口論を上手に避ける狡猾なのか。判別できずにシエリは諦めのため息を零す。

「パパならスコッチで買収できても、他の人はそうはいかないんだから。お願いだから家の敷地から外には出ないで。来客の時は絶対にその羽広げないください」

「不可解です。異形として僕が放逐されることはあっても、あなたは人間ですから無事でいられるはずです」

「二人まとめて病院に隔離されますってば、ディアジエは壁を抜けるかもしれないけど！」

「僕に羽があるとあなたが壁に閉じ込められる。無粋で硬質な平面と直線で囲まれた部屋に？ 羽を広げられない場所に その理屈は非合理です」

理解できないようで、ディアジエは困った顔でしきりに首を傾げている。シエリは彼が馬鹿か狡猾かなんて考えるだけ無駄に思えて遣りどころのない苛立ちを言葉で投げつけた。

「人間ってそういうものなの！ ディアジエが天使になれない理由が分かった気がする。ディアジエは人間のことなんて全然分かってない、なのに天と人間を取り持つなんて無理に決まっています！」

部屋に閉じこもって鍵をかけたところで、壁を自由に通過する天使の雛には無意味な籠城だ。そう気付いたシエリはざくざくと鴨の森を歩いていった。怒りは身体的な発散を要求する。

歩き疲れて怒り疲れて、池のほとりで足を止める。岸ぎわの土を踏めば草の根が抱いていた泥が押し出され、澄んだ水へゆっくりと渦を描いた。

「一人で空回りして馬鹿みたい。ディアジエは人間じゃないんだも

ん、分かり合えなくつても当然か」

恐らく天地は泉と同じ。泥の粒はどんなに上を目指そうと、いずれ沈んで底辺で墓地を形成する。だからこそ泉は澄んでいられる。天使の雛が人間の常識やしがらみに汚されたら、その重みは彼を底なし沼へ沈めてしまう。

妙なところで世間ずれしたディアジエが天に昇れずにいる理由を、シエリはそんな風にも考えてみる。

「それって寂しい話かもね」

「水際で遠い目して独り言は危険です」

「わー！ いつの間につ」

「六十メートル手前で視界に捕捉、そこから歩行速度が時速四キロとして接近にかかった時間は」

突然現れたディアジエは真面目に計算しだす。一キロが千メートルで、と呟きながら指先は電卓を弾くような仕草をしている。

計算高いんだか純粹なんだか分かんない、とシエリは肩をすくめた。

「……ごめんなさい。パパったらディアジエを当てにして、天国確定なんてあんな現金なこと言つて」

「ああっ、話しかけるから商を忘れちゃった。当て？ 僕とてあなたを当てにしています、シエリのアロマを」

「使つてない恋くらいあげます。でもディアジエは天使になりたくても、まだなれずにいるのに」

「使つてない天使の看板くらい貸します。天使の看板を欲しがらないのはシエリだけです。……でした」

何気なく言い直された語尾がシエリの胸をきゅうと締める。ディアジエは一步踏み出してシエリの隣に並んだ。

「僕はあなたに嫌われすぎたようです」

天を覆い隠す雲を困ったような笑顔が見上げている。

「せっかくあなたを見つけたと思っていましたが、諦めます。美しい泉ほど、近づいた自分の足で汚してしまう。ですからこれ以上は

近づきません。泉は澄んでいると相場が決まっているんです。死者の瞳が輝いてたらイヤなのと同じです」

「相変わらず例えばサイテーですね……」
大きな掌がふと中空をすくい取った。

「また降つてきました。日和乞いも雛の祈願ではこの程度です」

池の表面に無数の同心円が湧きだした。額に手をかざし空へ目をやったシェリの頭上を白い傘が覆う。

「真つ白でなくても、天へ飛べなくても、あなたを雨風から護る程度には有効です」

ディアジェの翼だった。雨滴が柔らかな羽根に当たる音は、たふたふと優しい。羽根の弾力や厚みの違いで音程が変わり、翼の下は様々な音階が遊ぶ貸切のリサイタルホールになる。

こんな優しい音色を聞く幸運にあずかれる人間は他にいたのだろうか、とシェリは思つて瞼を閉じる。

「部屋の中でなければ、広げてもいいのでしょうか？　雨が止むまでここにいます」

「止んだら？」

「新たな樽を探しに行きます」

「……なら、止まなければいいですね」

小雨の一団が、さあつと水面を鳴らして渡つていく。草、木々、そして翼の白と黒の鍵盤は複雑な曲を奏でて連弾する。ディアジェの唇だけが黙っていて、雨に止むよう諭さない。

雨と森と天使の雛が作り出す和音が響いていた。

「びくしっ」

厳かな指揮者然としていた天使の雛のくしゃみが演奏会をぶち壊す。思わず吹き出した客へ向けられた薄紫の瞳はバツが悪そうにしている。その紫色は出て行くと言いつつ前よりも青に近くなっている。アロマあげてないのとシェリを不思議にさせた。

「ディアジェ、目がラベンダー色してる。ラベンダーってラテン語の『洗う』が語源って知ってる？　魔性の混じった目の色でも、ち

「やんと洗い流せてます」

何を？ と不思議そうに首を傾けるのが微笑ましくて、シエリはわざと答えないでおいた。

「アロマ、いりますか？」

そばにあつた肩へ頭を預ける。雨が連れて来た涼しさの中で、天使の雛は温かかった。唇を寄せるディアジエの濡れた前髪から、小さな水滴がぱたん、とシエリの額へ落ちてくる。

「いま僕が欲しいのは、アロマより」

その先の言葉は、言葉でないもので伝わってきた。

雄弁な調べに鼓動が重なる。

膨らみすぎた気持ちちは心肺も喉も押し潰して胸を埋め、人から言葉を奪う。天が言葉を持たないのは、最も原始かつ完成された形で伝える術を忘れていないからだ。

だって、とシエリは思う。

そうでなければ死ぬほど胸が苦しくて、人類の叡智である言葉を一つも発せられないのを、どうして天にも昇る心地と讃えられようか。

唇で聴く天上の音楽は突如、大きな羽ばたきに遮られた。はつとして唇を離して見回せば、近くの梢でカラスが羽繕いしている。

「ねえ、ディアジエ。あのカラス、すごい馬鹿にした感じでこっち見てる気がするんだけど。しかも目が三つあるような気がするんだけど。翼に一枚だけ、白い羽根がある気がするんだけど」

「リュシアンめ、パパンに料理されちまえっ。……気のせいです。非科学的です」

「非科学の権化な天使の雛が言いますか。笑顔は完璧だけどその目、さつきよりむしろ魔性が増してないっ？ キスしたのになんでー！」
天使の雛を追うシエリの胸の片隅で、暗雲がとぐるを巻いて蠢いている。

ねえシエリ、恋は忘れちゃって。恋をしたらアロマがなくなつて、僕は、あなたのおそばには……。

7・もしも飛んでいってしまったら、なんて 特有の不安感

断る。魂を売っても手放せないものがある。

投げ付けた言葉に嘘偽りはない。

だが『互いの醜穢なるさまを慰める、一縷の口実にしがみつけど、』

告げた光の監視官の罰は聖剣より鮮やかに悪魔の胸を貫いた。

百年の間、その血は固まることを知らず、その傷は塞がることを許されない。

7・もしも飛んでいってしまったら、なんて 特有の不安感

「つくし！　いくしっ！」

結局、雨に打たれたシエリは風邪の虜囚となった。傘代わりをかっ出て出た癖にけろりと元気な天使の雛が、枕元で薄紫の瞳をぱちくりさせている。

「女性のくしゃみは子猫並みです。盛大に行った方がストレス解消です」

「ストレス解消のためにくしゃみしてるんじゃないんで　つくし！」

「そこですかさずウアーと唸るっ」

「天使の雛がオヤジの不法法を説かないでください！」

抗議するシエリの指は、きっぱりとドアを示している。ディアジエはその指先を見て、ドアを見て、また指先を見て首を傾げた。勘の鈍い様子にシエリは機嫌の悪い低い声を絞る。

「汗がベタついて気分悪いんです」

「お察しします」

「着替えます」

「手伝います」

結構ですと強く辞退して、シエリの指はきっぱりとドアを示し直す。ディアジエはその指先を見て、ドアを見て、また指先を見て首を傾げた。添えられた笑顔はあまりに爽やかだ。

「出てっつて下さい！」

「裸は恥と決めたのは人間です。僕は純粹にお役に立とうと」

「捨てられる寸前の子犬みたいな潤み目をしたって騙されません！

男子退出っ」

「男子かどうかはシエリの推測です。確認いつとく？」

天使の雛は羽を掴んで引きずり出された。病人はようやく着替えに成功したものの熱を余計に上げたようだ。窓を僅かに開け、涼しい風を招き入れる。

「あ、またカラス」

夕焼けを背にした森の梢で羽を休める黒い影。見つめられている気がして、シエリの背筋は落ち着かなくなる。布団に潜り込むことで不調と不快の遮断を試みた。

睡魔に溶かされていくどろりとした意識の断片は、大きな羽ばたきと窓枠を引っかく爪の音を聞く。しかしそれも流砂のような眠りに飲み込まれて沈んだ。

暗闇の奥に揺らく情景が見える。

石造りの壁をすり抜けて侵入した部屋は質素で、長らく反復された法則を窺わせる几帳面さで片付けてあった。部屋の最も上位な場所は一分の隙もなく調えられた祭壇に譲られている。綺麗にブラシのかかった僧服を見なくても、そこが聖職者の住処であることは明らかだった。

標的はまもなく夕刻の礼拝から戻るだろう

沈みかけの夕日を

窓の外に見やりながら、侵入者は大振りのナイフを鞘から抜く。

天使と悪魔の雛について知ってしまった聖職者。雛を天使に導くよう働きかけるだろう。ゆえにこの聖職者を亡き者にすれば、雛の秘密漏洩も魔界の人的損失も防げる。

魔界にとつては単なる聖職者殺しだけでも手柄だ。喝采を受けての魔界入りを図った侵入者は、近付いてくる足音に顔を上げた。柄を強く握る。ドアが開く。

「何者だ？」

戸口で息を飲み、すぐに厳しく誰何したのは若い娘だった。リネンを抱えている。侵入者は聖職者に同居する妹がいたのを思い出す。面倒な目撃者の口を封じるべきか迷った一瞬に、娘が言葉を継いだ。「雛だな。噂は兄から聞いている。しかし赤い目に黒い翼……そして何よりその凶器、兄を屠って魔王への手土産にと企んだか。ならば」

漆黒の強い瞳が侵入者を足止めする。賊は頭では殺すしかないと判断しているのに、美しささえ伴う気迫に動きは鈍る。娘の手が祭壇から短刀を取るのをただ見送っていた。

「ならば 私の屍を越える覚悟くらいは、あろうな？」

言い切らぬうちに繰り出された刃を咄嗟には避け切れず、黒い羽根が幾枚か散った。娘は長い髪をかきあげながら唇をすぼめる。

「どうした。こそ泥の方がよほど腕が立つぞ」

そして艶やかに、ふふん、と笑う。

「髪だけはまだ銀色だな。悪魔の雛は卵の殻を尻でなく、頭にかぶっているのか？」

挑発が侵入者の怒りに火を付ける。だが殴るようには突き出すナイフの先は、狭い室内でありながら娘を捕らえることができない。逆に聖水を浴びせられ、ひるんだところに足をすくわれ、気付けば仰向けに倒れた侵入者の喉元にはぴったりと刃が当てられていた。

「残念だったな、兄は出張中だ。戻ってくるまで牢に繋いでおいてやる」

娘は胸へ馬乗りになって見下ろしてくる。

「おまえは願ってもない資料になる。兄が喜ぶだろう、ふふ。……名は？」

「俺を仕留めたつもりでいるのか？」

押さえ込まれていてもばさりと大きく羽を打てば、巻き起こった風に娘の黒髪が舞い乱れた。髪で視界を奪った一瞬を逃さず、飛び起きた悪魔の雛は娘を組み敷く。細い手首を掴んで床に叩き付けると、短刀は部屋の隅へ飛ばされていった。

大きな瞳に狼狽が走る。それを眺めて満足げに赤い目を細めた侵入者は嫌がる耳元に囁く。

「油断したな。安心しろ、まだ殺しはしない。この世の全ての陵辱を味わわせてから……」

不意に鼻先を掠めた芳香に悪魔の雛は口をつぐんだ。

娘の引き結ばれた唇から純なるアロマが香り立っている。熟成されるほどに瑞々しくなる奥深い香りの束。限りなく悪魔に近い雛であろうと、雛である限りその芳香には麻薬より抗いがたい。

堪えられずに賊は唇を重ね、娘のアロマを貪った。悲鳴のような声を封じ、抗議して暴れる身体を押さえ込み、本能の欲するだけ堪能しようとした唇に鋭い痛みが走った。

ゆっくり顔を上げた悪魔の雛の口許から、ぽつりと赤い一滴が娘の頬へ落ちる。だが瞳はその血に吸い取られたように赤味を失い、薄紫へ変わっていた。

噛んだ娘は驚きに怒りと抵抗を忘れ、魔性の退いた雛の姿を啞然として眺めている。

「何故……目の色が……翼まで、白く」

「見るな……」

顔を背けた悪魔の雛は娘を放し、その場から逃げ去った。

明くる日、当初の決意を固め直して再訪した聖職者の部屋に、相変わらず人の気配はなかった。あの妹は悪魔の雛の襲撃を兄に通達しなかったのだろうかと不審がりながら、再び赤味を帯びた目が姿を探す。

廊下を抜けた食堂に娘はいた。

「来たな」

読んでいた本を静かに閉じる。用意してあった短刀を掴んで立ち上がる。それ以外の武器はなく、普段着のまま髪も纏めていない。赤い視線の軌道を察して娘は薄く笑う。

「雛め、同じ手が二度通用すると思うな」

顔の高さで短刀を構え、刀魂を味方につけるように娘はその刃に口付ける。

「悪魔に満たぬおまえなど、兄の手を煩わせるまでもない。今日こそしゃべってもらおう。おまえを　悪魔の雛を浄化する秘密を」

「喉を掻き切られても同じ言葉を吐いたら話してやるう」

昨日は娘の思わぬ気迫に圧されただけ。必ず屈服させ、ありとあらゆる恥辱で穢してやる。その決意は、刃を交えた末にようやく押し倒した娘の前で脆くも崩れ去る。嗅ぐまいとしても、アロマを吸いたがる本能は理性など簡単に押し流す。

乱暴にキスを奪っていた唇はやがて、すまない、と呟いた。瞳は青紫にまで聖性に傾き、羽は下縁を残して白く輝いている。

噛まずに経過を見ていた娘は逃げ去ろうとする腕を掴んだ。

「キスか？　キスが魔性を相殺するのか？　今のおまえはまるで天使だ」

「放せ、俺を見るな」

「逃げるのか。何故私を殺さない？」

「次は殺す。次に会えば必ず」

重い身体を引きずって帰還したのは貴族の別荘。無断借用している館の屋根で客人が月見をしていた。とはいえ湾曲した月は糸杉の葉先に絡まっついていて、月見客の容貌を宵闇に紛れさせてしまっ

る。

それでも悪魔の雛にはそれが誰か分かっていた。訪ねて来る者など他にいない。恥じ入るほどに白すぎる羽を小さく畳んで揶揄に備える。

「俺を笑いに来たのか？」

屋根の縁で暇そうにはさばさ揺すられていた羽と脚が、同類の帰りに気付いてぴたりと止まった。

「こんばんは、リュシアン。白鳥が求愛しそうな羽をしています。

君が悪魔になると息巻いてるといふのは誤報のようです」

「なるさ。明日こそは」

「迷える者に幸あれ。極上アロマの残り香を振りまいておいて、説得力は皆無です」

飄々として羽客は痛い所を突いてきた。この雛は故意にしる無意識にしる、相手を苛立たせるのがうまい。その気になれば、聖職者の血で手を染めたりせずとも、口先だけで悪魔になれるだろうと思えた。

悪魔寄りの性質を持ちながら抜け抜けと『天使になりたいのです』と微笑む友人に、リュシアンはいつも呆れていた。アロマを提供した女たちは幸いの知らせを授けてられてなお、死後の安息を望んで彼の迎えを請い願う。その懇願が鎖となりがんじがらめに地上へ縛り付けられていると、本人は気付いてもいない。

「リュシアン」

細い月を仰いだまま、友人はぽつりと言った。

「『光の監視官』にはご注意を。一度は堕ちたあの方が持つのは、清浄なる魂を選び分けるふるいでなく、釣り合わせる重りが要る天の裁きの秤　まさに天秤です」

「監視官ラグエルか。天使や雛が堕天使にならないよう見張るのが元堕天使だなんて、お笑い草だな」

振り返った心配そうな薄紫の瞳に、リュシアンは気付かない振りをする。

悪魔の雛と聖職者の妹との戦いは不毛になりつつあった。身を魔性に染め直して娘を襲撃するものの、アロマに屈して聖性を注がれ逃げ帰る。同じ攻防と同じ応答が何日も繰り返された。

だが数日後に悪魔の雛はふとキスを切り上げ、じっと娘を観察していた。

「……どうした」

組み伏せられたままの娘の囁きに含まれるのは追究でも疑問でもなく、もはや不満。見返す悪魔の雛は静かに問う。

「俺の目は何色をしている？」

「赤紫だ。……青に戻る度合いが日に日に弱くなっていたが、今日は全く効いていないようだな」

「おまえが俺に恋をしたからだ」

娘は怒りも否定もなかった。押し黙ったままだったが、さっと頬に差した朱が答えだった。濃いまつ毛が僅かに震える。

「おまえの樽は開かれた。もう俺を惑わすことは出来ない」

言い捨てて、悪魔の雛は大きな刃でひたりと白い細首を狙う。まだ痛みを与えていないのに、娘は痛みで顔を歪めた。

「敵対する者への口付けが聖性を生むのだな。その施しが雛を惑わすご馳走というわけか。敵対心が失せたから私は用済みなのだな」

「違う」

「では何だ。何がおまえを白くさせていたのだ」

問い詰められた赤紫の瞳は、一気に赤へ突き進んだ。

「おまえは兄に雛の浄化法を教えたい一心で俺を受け入れていたのか？ もしや手加減してわざと俺にアロマを与えてみせたのか？」

「……アロマ？」

「俺を愚弄したつもりか……」

怒りに息づく刃がもう一段強く押し当てられるのに、娘は真っ直

く見上げてくる。

「殺すなりなぶるなり好きにするがいい。私はとうにおまえの手に落ちている。貫かれている胸をもう一度突かれたところで、痛みなど感じない」

漆黒の瞳は穏やかに凧いでいる。

「おまえの目がルビーのような赤だろうとサファイアのような青だろうと、私にはどちらだろうが構わない。知っているか？ どちらも実は同じ鉱石だということを。本質を手に入れたのなら、色など障害でない」

黒は赤も青もあらゆる色を受容した色。悪魔の雛は正視できずに逃げ続けてきた黒い瞳に、ついに囚われる。ナイフを打ち捨て、代わりに指を肌へと滑らせれば、幸せそうな微笑が立ち昇る。

陶然として見つめ返す雛の目からは赤が、羽からは黒が抜けていく。満たされていく聖性に身を委ね、雛は呟いた。

「おまえを」

遮って、名はヘレスだと娘は教えた。

「ヘレス、おまえを魔界へ連れて行くと言ったらどうする」

「そこにおまえもいるのか」

リュシアンだと雛は答える。

「この先へ進めば行くことになる。互いに元の世界には戻れない」

「それでも……」

ヘレスの指がリュシアンの唇を愛しげになぞる。

「それでもおまえと共にいられるならば、本望だ」

唇以上のものが重なる。そして限りなく白に近かった翼は、完全なる漆黒に染まった。

二人を射したのは朝陽ではなかった。

強烈な白光は眩しさを通り越して網膜を痛める。かざした手の合

間に二人は天使の輪郭を認める。乱暴な逆光に埋もれる顔を見分け、リュシアンに赤に固定された瞳が瞬時に凍りついた。

「光の監視官……」

素肌にリネンを巻き取ったヘレスはそれを聞いて息を飲む。

「天使ラグエルか？ 墮天使が生まれぬよう統制しているという…」

…」

「悔い改めよ」

名乗りも挨拶もなく、光の監視官と呼ばれる壮年の天使は居丈高に言い下した。

「罪を懺悔し悔い改めよ。リュシアン、ヘレス、汝らに最後の機会を与えよう」

「悔い改める？ 愛を否定しろと？」

「我々はそれを愛とは呼ばぬ」

ヘレスの問いを監視官は無感情に退けた。

「それが天の意思か、光の監視官」

位階の高い天使を前にして、人間の娘は堂々と、清々しく誇り高い笑顔を咲かせた。

「断る。私は迷える子羊などではない。愛を、人間の強さを見下すな」

「我々はそれを愛とは呼ばぬ。リュシアン、汝の答は」

「断る。魂を売っても手放せないものがある」

天使ラグエルは無表情のまま、手にしていた長い聖剣の先をヘレスへ向ける。途端にヘレスの脚が崩れだし、赤黒い肉塊に変じていく。這い登る魔物のように迫る肉塊との境目に、娘は悲鳴を上げた。

「汝らの選び取った答だ」

リュシアンは腕は恋人を抱くが、変貌は止まらない。既に腰まで侵された半分人間、半分魔物の生き物は力なく悪魔の腕に残る身を預けた。

「リュシアン、愛している」

墮ちゆくのを悟ったヘレスは首を伸ばし、リュシアンに唇を重ね

る。触れ合った瞬間、悪魔の心臓の裏にある羽根が一枚、光と共に色素を飛ばされて純白に還った。

「愛していい……」

その言葉に形を与える代償のように、娘の身体はひとかたまりの魔物と化す。波打つ黒髪、強いまなざし、滑らかな肌を欠片も残さぬ醜い肉塊を抱いてリュシアンは何度も恋人の名を呼んだ。

涙に濡れて見上げた先で、睥睨する瞳は金属的な蒼さと冷ややかにさだけで構築されている。

「雛を一羽、堕ちずにおかせておけるならば」

光の監視官、ラグエルは既に娘の形をしていない娘を聖剣で指した。

「百年後に縛を解こう。……汝らが愛と呼んだものが残っていても、いなくても。さあ、立場をわきまえず身勝手な欲に溺れた汝らが傾けた天秤の、もう片方に載せる者を選べ。互いの醜穢なるさまを慰める一縷の口実にしがみつけ」

堕ちたのは、愛したから 短慮となじられた行動を正しかったと主張するなら、監視官の取引を蹴るべきだった。だが一筋の光明をちらつかされて、悪魔の欲が疼きだす。

天秤に載せる重りは自分たちの魂と肉体で完結すると思っていた。だが未来も奪われた。そればかりか道連れまで要求されて、リュシアンは後悔しそうになるのを、監視官の思惑通り悔い改めそうになるのを必死で思い留まる。

「祝福を受けぬものの末路を知れ。汝らの贄を選べ」

迷える者に幸あれ。

悪魔になると公言して敬遠されていたリュシアンにもすんなりと馴染んできた雛。友人と呼ぶのは居心地が悪いが、それでも事実上はそうである雛。アロマを捧げる女たちを樽と割り切れず、聖性と魔性をふらふらする危なっかしい雛。

月光に照らされた、嘘くさくても優しい微笑がリュシアンの脳裏を埋める。

すまない。おまえが恋をする時、俺はおまえの恋人を殺すかもしれない。堕ちさせないために。愛のかけがえのなさを知ったのに、知ったからこそ 監視官が課した天秤の重さは、リュシアン的心をめきめきと音立てて圧した。

「……………」

悪魔は友の名を呟く。

すまない。おまえの恋人を殺すかもしれない。

殺すかもしれない。

コトンと硬質な音に意識が繋がりはじめ。

続く小さな金属音が窓の施錠と思い出して、シエリはゆっくりとそちらへ首をめぐらせた。枕元のランプが照らす暖色の部屋の中で白い羽がぼんやりと浮かび上がっている。焦点が結ばれるにつれ、汗で額やうなじに張り付く髪の毛の不快感、脳を腫らすような鈍い熱も存在を主張しだした。

「ディアジエ？ 窓、閉めると暑いんですが……………」

「不用心です」

抗議空しくきつちり閉められた窓のすぐ外を、大きな羽ばたきの名残惜しそうな緩慢さで去っていった。

熱の籠もったため息をつくシエリの視界の隅に見慣れないものが映る。ベッドの支柱に吊られたドリーム・キャッチャー。悪夢を絡め取り安眠をもたらすという蜘蛛の巣をかたどったお守りだ。

何故こんなものがここにがあるんだろうと思っても、病人の頭はうまく回らない。

「熱のせいかな……………変な夢見てたの。妙に生々しくて」

顛末を話しながら悪魔に堕ちた赤い目の雛を思い出し、熱に起因しない寒気を覚える。

「あの目、どこかで……………」

記憶を辿る糸はだるさに阻まれ上手に引けない。苛立たしく額の汗を拭う。

「知ってる気がするのに」

ディアジエがそつとベッドへ腰掛けてきた。静かに羽を広げてごく緩やかに羽ばたかせれば、柔らかい風が起きてシエリの熱も不機嫌も逃がしていく。ドリーム・キャッチャーに結ばれた羽根の羽毛もひよひよと揺らす。

ささくれた気分をなだめる優しい動きを眺めていたシエリはふと羽根の出所に思い当たった。

「お守りについてるの……ディアジエの羽根？ 作ってくれたんだ、ありがとう。怖い夢だった。怖いっていうか悲しい、やりきれない……」

「ご心配なきよう。眠っちゃって、シエリ。今度は良い夢を」

「……目が覚めたら飛んでっちゃってたりしない？」

「僕にとつての天は今、地上にあるのです」

嘘くさくても優しい微笑を見届けて、シエリは安息のうちに瞼を閉じる。

8・自由に仕舞えたら楽なのに

ずるりと重たげに床を抜けてくるさまは、羽化にてこずる黒い蝶さながら。

「……たくおまえはどこで覚えてくるんだ、東洋の陰湿な呪いなんぞ」

呆れた悪魔が首を振れば、何連ものピアスが葉ずれのようにしゃらしゃらと鳴る。藁人形に黒い羽根をくりつけて五寸釘の照準を定めていた天使の雛は、ハンマーを持ったままにつこりと出迎えた。「こんばんは、リュシアン。こうでもしなければ、どんなに呼び出そうと君は居留守です」

「あのなあ、まず普通に呼び出そうって努力をしてから実行に移したらどうだ。いきなりそれか。そんなんで堕ちられたら心臓に悪いぞ」

「これは失礼を。はい悪影響です、光の監視官の天秤皿で質草になっっている君の心臓に」

無言で帰ろうとする悪魔の背後で、藁人形が壁に打たれるカツンという音が響いた。

「静粛に。シエリが起きてしまいます」

「おいおい、俺のせいかな？」

「悪魔がシエリに悪夢を映していました。やっと寝かしつけてきたんです。病身の乙女を苦しめるなど、ああ不屈きで不埒な魔物め、一体誰なんだちくしょう。リュシアン、僕はやつが憎い」

「……なんでおまえが悪魔じゃないんだらうな」

大根役者も真っ青な棒読みの呪詛を、悪魔はひらひらと手で払いのけつつ観念した。リビングの最も暗い場所を選んで座り込む。漆黒の髪も翼も衣服も影になじみ、白い顔と赤い目ばかりが存在を知らせた。

「さて、シエリの夢でどこの悪魔がどんな青春全開・愛の暴走劇を

熱演しちゃったのかは僕には不明ですが」

ディアジエは真剣に首をひねってみせる。

「白鳥に求愛されそうな羽をして『明日は悪魔になるんだー』とのたまった、説得力超絶マイナスの雛には若干一羽、覚えが」

「ほお。カラスに求愛されそうな羽をして『天使になりたいのです』とほざいてる雛なら知ってるが」

「僕に話が漏れるのを計算してシエリの夢へ入るなどと、他言無用である取引を破棄されかねない抜け駆けです。ああ何だか無性に光の監視官にお会いしたくなってきました」

天に昇れず長年にわたって地上をうろろろする雛たちにとって、彼らを監督する光の監視官は鬼軍曹並みに会いたくない相手だ。その監視官の姿を探して、地上滞在年数史上最長記録を更新し続けている雛は、窓越しの星空へ切なげなため息を漏らした。

「なんでおまえが悪魔じゃないんだろうな」

赤目に疲れを滲ませる悪魔の呟きは嫌味でなく嘆きに近い。

「なんでって」

人質に等しい黒い羽根つき藁人形の首根っこを掴んだまま、天使の雛は嘘くさかった笑顔を引き締めた。

「僕には、天使になる理由ができたんです。聞きたいですか？ 聞きたいですね？」

組んだ腕の上で、悪魔の伸びた爪先が苛立たしげに揺らされ続けている。本来は悪魔の好物である居心地悪い沈黙を、天使の雛はたつぷりと引き伸ばした。

「静かです。饒舌は悪魔の専売特許なのに、今夜はもう店じまいのようです」

「おまえの厚顔は年中無休でお忙しいことだ」

「君の水臭さには完敗です」

さらりとした口調に反して、ディアジエの指先は藁人形の後頭部をべちんと恨みがましく弾く。

「光の監視官が課す天秤の取引の過酷さは噂に聞いたことがありません。僕は長く雛をやっているので見聞が広いのです。えへん」

「これはまた、物は言いようってやつだな。昇れないのをそこまで正当化して胸張る雛が、後にも先にもいてたまるか」

「愛する者を救いたければ、雛を一羽、堕ちずにおかせておかねばならない。その雛の恋人を殺すことも厭わない　さすが一度は堕ちた天使ラグエル、悪魔も顔負けの甘美で冷酷な取引です。参考になります」

「待て、参考って……」

天とは決して許し与えるばかりの存在ではない。でなければ人は、過ちや不幸に自分が選ばれてしまった理由を見出すことが出来ない。天の試練、そう考えるだけで苦境に耐えられるとしたらそれは、何も語らぬ天から人類がひねり出した最高に便利な発明だろう。

リュシアンはラグエルを通して試練を明示されただけ、恵まれていたと言えた。

「そんな約束をさせられておいて、あれほど僕に堕ちてしまえと煽るなんて、とんだ天邪鬼です」

「悪魔が天邪鬼なのは当然至極、文句は受け付けないぞ」

正当化合戦を相討ちに持ち込んでも、リュシアンの口調は苦々しい。

「で、呼びつけた用向きを早いところ吐いたらどうだ。俺はせいぜい用心しろと親切に警告して差し上げたただだ、謝るつもりはさらさらないね」

「君の謝罪なんて不気味なので遠慮します」

うえ、とディアジエは酸っぱいワインよりもそんな顔を作って退ける。

「……ただ、シェリだけは天秤皿の外にいさせてやって欲しいのです」

暗がりから、呆れとも嘲りともつかないため息が漏れ出た。

「お門違いだな。おまえ次第だろ、ディアジエ。おまえが『アロマよりキスが欲しい』なんて口説きだすから、俺の選択の余地がなくなる」

「うん、プラトニックは拷問だよー」

「……俺を見るな」

かつてあつさり陥落した経験者は、無邪気を装った問いかけに目を逸らす。

「拷問ですが、それでも僕は天使になりたいのです。頼まれなくても、僕が　僕こそがシエリを迎えに行つてやりたいからです。そう決めた以上、僕が君の天秤皿から墮ちる心配は無用です。となれば君がシエリを脅かす必要性は皆無です」

井戸から溢れ来る水に手を晒し、Waterと叫び、世界の鮮やかさを知ったヘレン・ケラーのように。

魂の奥底から湧き上がる清浄な情熱に身を打たれながら、これが恋だ、これが愛だと悟つたすべての者に翼は生える。天へと突き抜けそうな喜びも、そこから打ち落とされる痛みも知る。

「僕は心の羽のないまま、巣立つことばかり考えていました。今の僕はシエリに授かった羽を大切に育てて、天使になりたいのです。どこかの純情悪魔も監視官ラグエルにのろけて力説していました、想いは魂を売つても手放せないと」

「……あのなあ……」

ようやく絞り出された声音には、どうにか内心を立て直した後の疲労がありありと窺えた。

「俺を楽しませるとは言ったが、呆れさせるとは頼んでない。鏡でも見る、おまえの目が今どれだけ青いか、自覚あるか？ あんまり純愛なんぞしてると、今すぐ天使一直線だぞ。ふん……天秤皿の外

？ どうせ俺が女を殺せぬ性質だと、知っているくせに」

「その言葉　君は天邪鬼な悪魔ですから、信用すれば僕は自滅です」

ですが、とディアジエは背筋を伸ばした。正しい姿勢には不思議な力がある。場の空気をも整列させる。きちりと澄んだ空気の中、ディアジエの視線は最短距離でリュシアンを捕まえる。

「僕は友人を信じます」

青い目に真つ直ぐ射抜かれて、赤い目が苦痛に歪んだ。

空気というのは優れた絶縁体で、言葉という音波で破らなければ互いの気持ちは通じない。だから人類が天にも届く不遜な塔を建設した時、天は言語を分割して伝達的手段を奪い、人々を挫けさせた。だが、とディアジエは思う　言語以外の方法で送受信し、そのアンテナを磨くことでいくらかでも知ることが出来るのに。誰もがそう努めれば、言語での分断など何の妨害でもなかったのに。

現にリュシアンからは、陽光の差した凍土が解き放つ繊細な霧ほどに、微かだが確かに大気を湿らすものが伝わってくる。

「……まだ俺を友と呼ぶのか。間抜けめ、だからおまえは天に昇れないんだ」

「そうかもしれませんが。ですがリュシアン、君はシェリの命を脅かすと宣戦布告したのではないでしょう。取引破棄されかねない危険を冒してまで、僕に、自分と同じ轍を踏むなと忠告してくれました」
「けっ、と短い息でリュシアンは場を穢す。」

「忠告だ？　曲解もいいとこだな、どこまでおめでたいんだ」

「天邪鬼な君のイエスと受け止めます。だからシェリがいて、君がいて、今の僕は安らかな気分です」

穏やかな笑顔を前にして、悪魔は否定するのを諦めたようだった。

「はあ、俺としたことが、とんだ期待はずれ。女と自分を天秤にか

けたのか、って罵る顔が見物できる筈だったのになあ」

こめかみを載せて立てた片膝は、アースのようにリュシ안의愚痴を外へ垂れ流しているようだ。不運を天の試練と割り切れない者にとつての発明は愚痴だ。

「ヘレスをチップに積んじまっただけなのさ。監視官との賭け、こいつがどれだけしぶとく墮ちずにいられるかの賭けに。そう思い込むのが面倒でなくていい」

「いま気付きました、『ヘレス』はスペイン語でシェリー酒のことです。リュシアンが彼女を食い物にする運命が定まっていたかのよくな名です。食い物どころかチップにまで……鬼畜。外道。悪魔」
「棚に上がるな、アロマの提供者に『シェリ』と名付ける天使の雛め」

「何てひどい誤解なんでしょう、あれはフランス語で愛しい人という意味で」

悪魔は黙って、嘘に黒を増大させたディアジエの羽を指差した。天使の雛は黙って、リュシ안의黒い羽根に一本だけ輝く純白の羽根を指差し返す。

「雛にとつて羽は心を映す鏡です。心を自由に仕舞うことは困難です。仕舞い込めたなら、どれほど楽なことが」

「……悪魔も同じだ」

「はい。きつと、見えなくても、人間も。誰もが、仕舞っておけない心で飛ぼうと必死です。なのに」

ディアジエは藁人形に類ずりする。

「なのに非道です。僕は被害者の身ながら、心は仕舞えないと理解して美しき友情と愛情に殉じようというのに。ねえリュシ夫もそう思うでしょ。思うならあいつを呪っちゃって。天使にしておしまい。プラトニックという拷問にかけておしまい」

「おまえ、ロッククライマーか？ 小指一本で天秤皿からぶら下がってる状態じゃないのか？ あのなあ、俺が礼を言う屈辱的な姿を期待してるんだらうが」

「謝意はあると確認しました。ですが君の土下座は不要です。言葉など無価値です。きっちり働いて頂きます」

逃がしません、と口に出さずとも明確に伝えるディアジエの指が、リュシ夫をがっちりとホールドした。

「……なんでおまえが悪魔じゃないんだらうね」

「なんで君が悪魔なんだらうね」

自棄な文句と盛大なため息を零す悪魔に、天使の雛はきらめく笑顔振りまいている。

「面目躍如と参りましょう。ある頑固オヤジに悪魔の囁きを一発、お願いします。白い羽募金にご協力を」

9 . 天使みたいに見えたのは きつと 微笑と逆光のせい

あなたの樽は開かれました。

アロマは待機して熟成中の恋心の香りは残っていない。だからもう、あなたには新たな樽が必要です。

……出立の時です。

9 . 天使みたいに見えたのは きつと 微笑と逆光のせい

額へ、目尻へ、頬へ。羽毛が降ってくる。触れた瞬間に肌理の間に融けて馴染んで、優しいいくすぐったさだけが残る。降り落ちる前に掴めば融かさず留めておけるのだろうか 伸ばした指は、ごきんと鈍い衝撃を感知した。

「あうっ」

悲痛な叫びに目を覚ませば、鼻が触れそうな至近距離にディアジエ。その頬に刺さらんとする自分の指。シエリは瞬きを繰り返して、最早そこが夢でないことを確認した。

「……あ、ごめんなさい。朝ごはん中だった？」

赤紫の瞳がふるふると憂える。

「純真無垢な愛と誠のキスなのに、殴るなんて無体です。僕の顔に傷がついたら、笑顔だけで騙せる女性も騙せなく」

「ああ、出会った頃の、簡単に信じてくれたシエリを返して欲しいです」

頬のみみず腫れをさすりながら、わふわふ大好き天使の雛はどさくさ紛れに羽毛布団へ縋りついている。

「誰が疑心暗鬼にしたか分かってますか……」

布団に埋まったディアジエの顔周辺から、チツと忌々しげな舌打ちが聞こえた。だが一拍後に上向いた顔は悲壮で、死刑台へ曳かれて行く天の御子を前に泣き濡れる、忠実な使徒のよう。

「ご馳走様でした、忘れ得ぬ最後の聖餐でした」

ぱきん。と、身体の芯が凍りつく音がシエリには聞こえた。

「……最後？」

「あなたの樽は開かれました」

あなたの名は、シエリ。ぴったりでしょう。

名付けてくれたその最初から、ディアジエの呼びかけは優しくかった。シエリと呼ばれる度に自分がディアジエのなくてはならない存在だと実感できた、たとえそれが食料製造工場、兼、保管庫の意味だとしても。

だから『あなた』と言われるのがあまりに他人行儀に感じて、もう無価値な存在なのだ告知された気がして、シエリの　今やシエリと呼ばれる資格を失った彼女の心臓から血が引いていく。

「雛が食するアロマは待機して熟成中の恋心の香り　だからもう、あなたには残っていない」

否定形の文末。天使の雛が、いささか不自然でも避けてきた表現であることに気付いた。不、無、非で始まる単語を多用して否定形を和らげてきただけに、いきなりのそれは痛烈な棘となって虚血した心臓に刺さる。

「僕には新たな樽が必要です」

出会いの冒頭から知らされていた事実。いくら唇を重ねても聖性を取り戻さなくなった、ディアジエの瞳や羽。夢の中で悪魔の雛は言った　この先へ進めば魔界へ行くことになる。天使になりたいのです、と笑うディアジエ。

様々なものが彼女の脳裏で乱舞しては堆積する。

「……出立の時です」

禍々しい赤紫の瞳の癖に、ディアジエが句点代わりに置いた笑顔

は爽涼だった。

「もちろんツケはお支払いします。食い逃げ魔界放置は悪魔の雛の所業です」

窓の外で抗議するようなカラスの鳴き声は、耳に遠い。

「どうして？ どうして行っちゃうの」

理由など分かりきっていても、寒さに感覚麻痺した脳はそればかりを繰り返させる。

「あなたの樽は開かれ」

「あなたあなたって連呼しないでよ！ そんなよそよそしいの、嫌」

ごねた口調が細くて頼りないのが惨めで情けなくて、彼女の涙腺は決壊しそうになる。全身が寒くてたまらないのに、目だけに熱が溢れてくる。

天使の雛は緩んだ表情のまま困った眉をした。

「……『シエリ』と呼ぶべき盟約は解消です。そもそも真の名を知らずして契約は不可なのが無用心です、あっけなく引っかかってくれちゃって。ちっとも騙し甲斐が……いた、いたた、羽根をむしるのは痛いですっ」

「ツケ回収。羽根枕」

一瞬にして熱の萎えた瞳に映るのは最早、恋人でなく枕の材料。

「ああっ、久しぶりのアロマの香り……恋から待機中に後退？ 成程、恋の境界線を保てば時々はアロマ摂取も……いてて、そんなことしてる間に物理的に飛べなくなりそう。落ち着いて下さい、僕はあなたの羽根枕でなく あなたを包み護る、羽根布団になるつもりなのですから」

きゅっと手を握ってくる天使の雛の瞳から、赤味が抜けていく。

朝焼けから脱け出して地上を輝かす青空のよう。人間に有り得ない色彩の移ろい、嘘のなさを証明する瞳をじっと見つめていた彼女は、

やがてゆっくり頷いた。

「ディアジエがそう言うのなら……量、足りませんが」

「痛いですってば、比喻です。羽根布団というのは、あなたを包み護る存在でありたいという意味です。つまり」

「パーティボレロなら足りるかな……」

「つまり僕はあなた専属の天使にっ」

ボレロにするなら、白い羽根を選んでむしろなくちゃ。マラボーみたいに細くて柔らかくて毛足が長くて豪華なところ。きつとベルベットのドレスにぴったり　天使の雛を組み敷いて、彼女はじっくり品定めに入る。

「騙す時は口達者で、口説く時は口下手ときた。おまえが色恋沙汰で墮ちる懸念なんぞ杞憂だったか」

窓枠に降り立ったカラスが呆れて呟いたような気がするも、羽毛選定で一杯の彼女は即座にその存在を頭の中から退けた。

「さすがジビエ・レストランの娘、むしろ手さばきがプロです……」

「いいね、その調子で全部むしったら雛も人間になるんじゃないのか。さあ、むしってしまえ、一本残らず」

「リュシアン！　悪魔の囁きは勘弁ですっ」

寝込みを襲った筈の天使の雛は形勢逆転され、羽根の舞う中、着衣の乱れた肩を打ち震わせて悲嘆に暮れていた。

「僕は身も心もいたく傷つきました。愛の言葉よりあなたは、羽毛むしりに夢中だなんて。僕よりキラキラやまふまふに惹かれるなんて」

「だって、ディアジエが傷ついたって自己申告にも愛の言葉にも、ろくな思い出がないんだけど」

「くそ、狼少年か……。あ、場が開きます」

案の定、けろりとして平常に戻ったディアジエは壁時計を見るや

立ち上がり、いそいそとパソコンの前に陣取った。

「いざオンライントレードのお時間です」

「……はい？」

「管理料や手数料を吟味して選んだネット証券にあなた名義の口座を開設して、ネットバンキングでパパンの銀行口座から全額を振り込んでおきました。利率の低い当座預金にこんなに置いとくなんて財テク能力ゼロです、パパン」

天使の雛が、清廉潔白を身上とする天使の雛が口汚く始めた金の話を、彼女の耳は本能的に着信拒否を試みる。天使の雛がやけに手慣れた様子で文明の利器を扱うのを、彼女名義の口座にアクセスするパスワードがちゃっかりとdiageであるのを、彼女の目は受信拒否したがる。

「スカイ島に良質なスコッチの醸造所があるのですが、頑固な経営者と組合員の衝突で長らく生産停止になっていました。ところがどうしたことがこの頑固オヤジ、昨晚急にギャンブルがしたくなり、大負けに負けて、持ち株を手放さざるを得なくなるそうです。ああ恐ろしき人の欲、悪魔でも囁いたのでしょうか」

後半の口調の嘆かわしさは瞳や羽の色を確かめるまでもなく、極めて噓くさかった。

「されど、これぞたまったツケに相当する幸いの知らせ。この株を押さえれば経営権はこっちのもの。蔵で熟成中の樽も、組合と和解して生産開始する樽も、Angel's Shareは最優先でいただきます。あなたのアロマに頼らずとも、僕の聖性を保つには充分。天使諸先輩に恩を売れるほど充分です 株の買い注文、出しました」

すかさず画面には約定成立の通知が表示される。

「はい、Angel's Share確保。生産再開すれば株価上昇しますから、少し売り抜ければ無断拝借したパパンの元手は回収出来ます。雛は下界社会に直接交渉不可ですが、アロマ提供者と幸いの知らせを活用すれば楽勝です」

花咲くようにディアジェは笑顔をはこぼせる。

フランス窓からふんだんに差し込む朝陽を後光のように背負えば、天から授かりし金色の羽のよう。逆光に銀白の髪を煌かせ、慈しみ深き微笑を湛える姿はまるで天使そのもの。

だが笑顔の中心には限りなく赤い瞳が居座っている。娘はおずおずと切り出した。

「あのう……出立はどこへ？」

「しました。Angel's Share確保の旅への出立。そして今からは、僕とあなたの新たな段階への出立」

腕と漆黒に近い羽が開いて抱き寄せられる。見慣れているのに見慣れない色をした瞳が覗き込んでくるのを、娘はぼんやりと見返していた。それでも口付けの気配には呼応してゆるりと瞼を閉じる。

悪魔にするのはしのびない。その一心だけで与えた、かつてのキスと同じ。最初のひと触れは、思わぬ温かさに驚いたように互いが身を強張らせた。だが再び寄り添えば、もう迷いなく授受を繰り返す。重なる唇のせわしさは、長い不在に耐えかねていた恋人のよう。

そして存在を融け合わそうと情熱を傾ける恋人たちのものへ変わっていく。

あと僅かでも短慮という風が吹けば転落しそうな水際で、ディアジェの唇は名残惜しそうに離れた。

「……美しい泉ほど、近づいた自分の足で汚してしまう」

声で世界が崩れるのを恐れているみたいに、密やかな囁き。

「ですからこれ以上は近づけないとしても僕は、あなたと一秒でも長く寄り添い、あなたより一秒だけ早く、天に昇るつもりです。天使としてあなたを迎えに戻ります」

瞬きのうちに赤は青味を帯び、紫を通過して、青へと変貌する。

朝焼けの空、オーロラの夜空より鮮やかな彩色が彼女の視界を埋め尽くす。

「だから最期の一秒だけ、そばにいてあげられなくても許してくれ

ますか？」

最期の一秒と引き換えに、それ以外の時間を。激情と引き換えに永遠を。

彼女は思う。これは何も、相手が天使の雛だから受ける試練ではない。誰しもが多少なりとも抱える各々の事情という分銅に対峙し、自らの意志では動かしがたい天秤を保とうとする。

Waterと叫んだヘレン・ケラーは三重苦の分銅で世界を、恋を悟った者は現実の分銅で愛を。

生が死と対であるように、常に分銅を求められる世界は均衡を指して揺れ動いている。天使と悪魔がそれぞれの領土に留まらず、雛や人間の内に同居して揺れ動いて当然。

けれど、たとえどれほど重かろうと、同じ分銅を相手に喜怒哀楽する天秤皿に、共に乗っていたいと願う伴侶を選ぶのは自由。

最期の一秒だけ、そばにいてあげられなくても許してくれま
すか？

「はい、ディアジエ」

宣誓を込めたイエスに対する褒美は幸福な笑顔だった。ここにも秤の法則が効いてる、とシエリは喜ばしい発見をする。

「ならば盟約の再締結です。あなたの本当の名は？」

「……シエリのままでもいいです。だって約束したんだから、これ以上いちいち盟約とか契約とかしなくて充分じゃないですかっ」

「うつつ、人間界における結婚の誓約を試してみただけなのに、拒否するなんて非道ですっ……チツ、用心深くなっちゃって。暴走

すんの目に見えてるから、制止役を押し付けたかったのにツライ。

ま、役割分担は最初が肝心……ふうん、その名を選ぶとは僕に食われる運命でいいんですね、シエリ。では遠慮なくいただきます」

「ん……え？ ちよつ、ちよつとディアジエ、嬉しいけどこれ以上はまずいんじゃない……わーストップ！……あれっディアジエ？

ごめんなさい殴りすぎたっ」

すかりと晴れた青空に、風見鶏が上機嫌で胸を張る。思いもよらぬ遠方から幸福の便りが届く予感、そんなくすぐったい風に尾羽を立てて。

濃い森に映えるターコイズ色の六角屋根。頂上の風見鶏には、天からの来訪者にしか見えぬ札が掛けられている。

『 Angels Share あります 』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721v/>

Angel's Share 天使の分け前

2011年7月21日21時41分発行